

蜘蛛流大工棟梁横田氏の木鼻絵様について

— 横田家大工文書の研究(5) —

Consideration on the Design Style of “Kibana” Created
by the Yokota Family, or the Master Builders of the Kumo School

白井 裕泰*

Hiroyasu Shirai

1. はじめに

横田氏は、東北地方において蜘蛛流と呼ばれる大工集団を形成し、江戸後期から明治期にかけて活発な建築生産活動を行った大工棟梁である。

横田氏が残した859点に及ぶ大工文書は、この地方における地方大工の建築生産活動の実態を明らかにする上で極めて重要な資料であるが、本研究は「蜘蛛流大工棟梁横田氏の虹梁絵様について」¹⁾の分析に引き続き行うものであり、横田家大工文書の内木鼻絵様図を基本資料として取り上げて、蜘蛛流大工棟梁が建築した作品にみられる絵様の変遷を体系的に把握することを目的としている。またその結果として、名称不明の絵様図がどの建築作品に用いられたかを特定できることを期待している。

2. 木割書における木鼻絵様

横田氏の絵様を分析するにあたって、ここでは木鼻の絵様を取り扱うことにするが、江戸時代の代表的な大工雛形書の中に絵様が扱われているもので須原屋茂兵衛蔵版の大工雛形書として以下のようなものがある²⁾。ただし「大工絵様雑工雛形」は岐阜屋(正文堂)清七が版元で

あるが、参考資料としてここに上げておくことにする。

- ①鈴木重春「大匠雛形 彫物絵本」正徳4年(1714)
- ②官匠廣丹辰父「匠家絵様集」宝暦9年(1759)
- ③小暮甚七「新撰雛形 絵様」宝暦10年(1760)
- ④立川小兵衛「大和絵様集」宝暦13年(1763)
- ⑤二柳先生「彫工雛形」文政10年(1827)
- ⑥奴長兵衛「当世いろは絵様集」天保5年(1834)
- ⑦落合大賀範国「大工絵様雑工雛形」嘉永3年(1850)

それぞれの雛形には次のような絵様が描かれているが、概して時代が下るにしたがって絵様の種類が増え、より複雑化していることが窺われる。

- ①「大匠雛形」：象鼻、獅子鼻、獏鼻、寅鼻(上巻)渦鼻、略象鼻(下巻)
- ②「匠家絵様集」：渦鼻、略象鼻
- ③「新撰雛形」：渦鼻、渦若葉鼻、略象鼻
- ④「大和絵様集」：省鳳凰鼻、渦若葉鼻、やっし鳥甲鼻、略象鼻、省猪鼻、渦鼻
- ⑤「彫工雛形」：渦鼻、波鼻、獅子鼻、寅鼻、渦若葉鼻、龍鼻、獅子鼻、象鼻、麒麟鼻、

*住居学科

獏鼻

- ⑥「当世いろは絵様集」：雲水鼻，波水鼻，渦若葉鼻，蔓若葉鼻，雲鼻，波鼻，象鼻，獏鼻，獅子鼻（横面・振面），龍鼻，寅鼻
- ⑦「雑工雛形」：龍鼻，獅子鼻，象鼻，獏鼻，渦若葉鼻，蔓若葉鼻，雲鶴鼻，波千鳥鼻，雲鼻，波鯉鼻，菊鼻

2-1 絵様の分類

これらの木鼻絵様を部位，形状，彫り方で分類すれば，次のようになる³⁾。

- a) 部位：頭貫鼻・虹梁鼻・肘木鼻（拳鼻を含む）・腕木鼻・破風尻鼻
- b) 形状：
 - 動物形／象・獅子・龍・獏・麒麟・寅・鳳凰・千鳥・鯉
 - 植物形／若葉・蔓若葉・菊・水仙
 - 天象形／渦・波・雲・流水
- c) 彫り方：
 - 平彫り／基本的に植物形・天象形木鼻
 - 丸彫り／基本的に動物形木鼻

ところで動物形木鼻は「略象鼻」のように丸彫の動物形木鼻を省略したものがあり，植物形木鼻と天象形木鼻は「渦と若葉」「流水と菊」というように組み合わせられて使うことがある。また彫り方で透かしを入れたものがあり，平彫りで透かしたものを透彫り，丸彫りで透かしたものを籠彫りという。

また「拳鼻」は近世の雛形書では拳状の木鼻，すなわち形状からきた用語であり，現在のよな部位による木鼻の名称ではなかった。したがって平彫りの植物・天象形木鼻の形状は拳鼻系と（略）象鼻系，（略）鳥甲系に大きく分けることができたといえよう。

2-2 絵様の変遷

大工雛形書における絵様を，動物形木鼻，略象木鼻，天象形・植物形木鼻に分けてその変遷をみると次のようになる⁴⁾。

1) 動物形木鼻の変遷（図2-1～2-17参照）

動物の種類は「大匠雛形」（1714）では象・獅

子・獏・寅があり，「彫工雛形」（1827）では象・獅子（横面，振面）・龍・麒麟・獏があり，「当世いろは絵様集」（1834）では象・獏・獅子（横面，振面）龍・寅があり，「大工絵様雑工雛形」（1850）では象・獅子（牡丹獅子）・獏・（見返り）龍があり，象・獅子・獏は各時代に共通したモチーフとして用いられている。龍および振面獅子が「彫工雛形」（1827）以後に用いられていることに注目する必要がある。また象の造形をみると，象の耳が「大匠雛形」のものに比べて「彫工雛形」以後のものの方が大きくなったことを指摘することができる。全体を通してみると，概して時代が下るにしたがって描写が細かくなっていることがわかる。

大匠雛形（図2-1～図2-4）

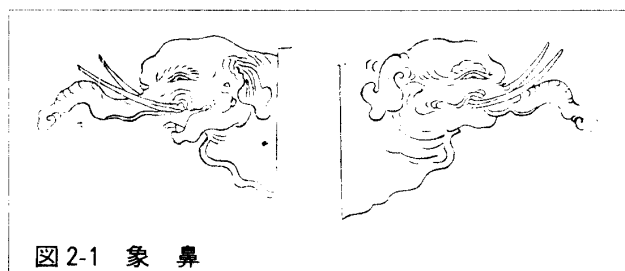


図2-1 象鼻

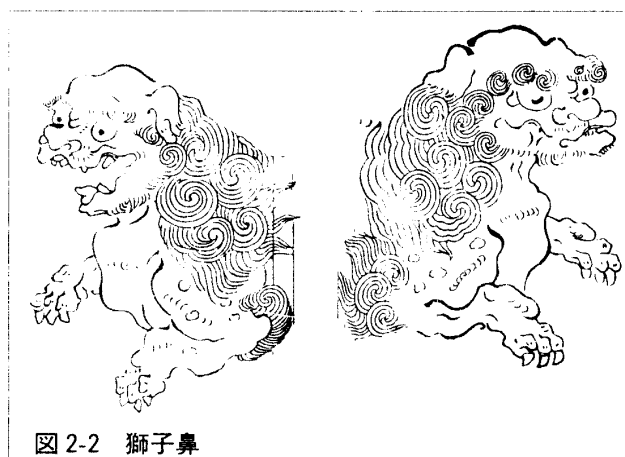


図2-2 獅子鼻

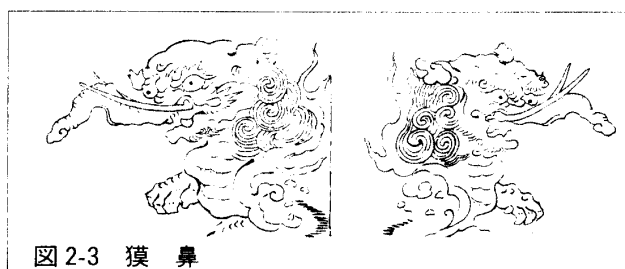


図2-3 獏鼻

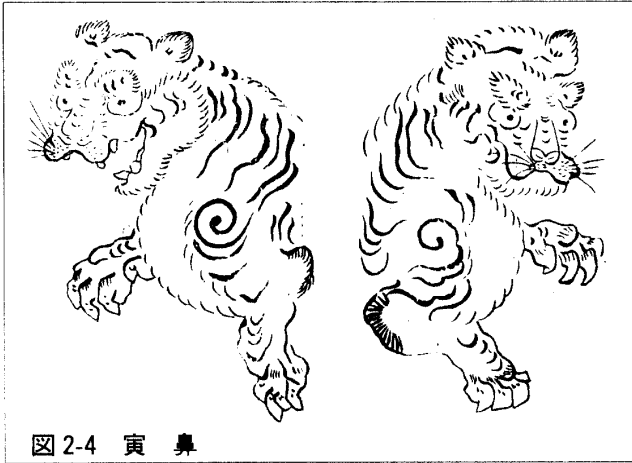


図 2-4 寅 鼻

彫工雛形 (図 2-5~図 2-8)

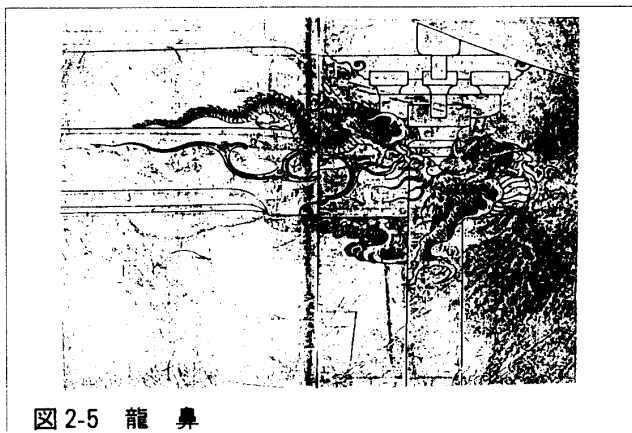


図 2-5 龍 鼻

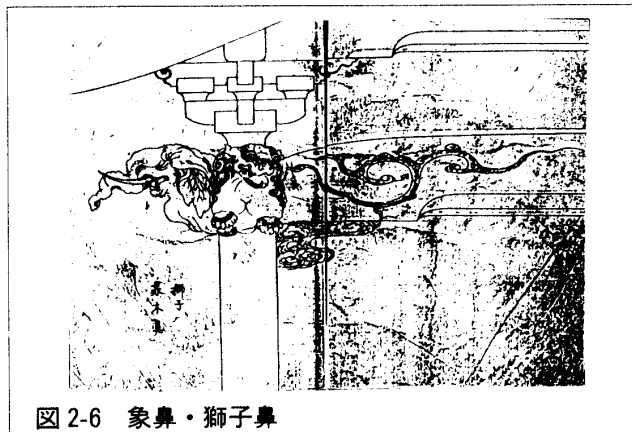


図 2-6 象鼻・獅子鼻



図 2-7 振面獅子鼻



図 2-8 振面猯鼻

当世いろは絵模集 (図 2-9~図 2-14)

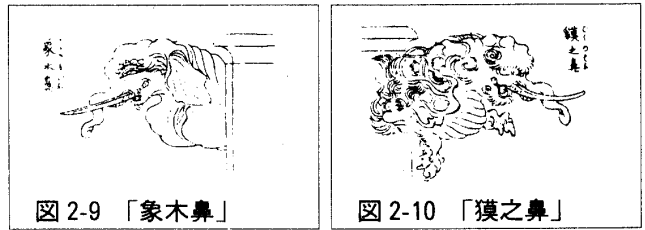


図 2-9 「象木鼻」

図 2-10 「猯之鼻」

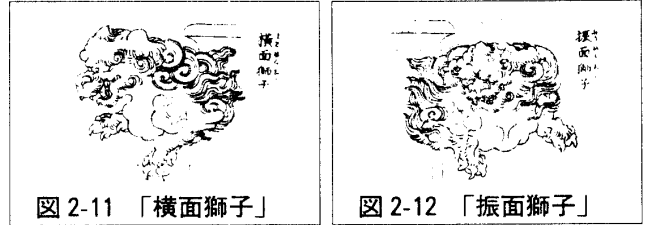


図 2-11 「横面獅子」

図 2-12 「振面獅子」

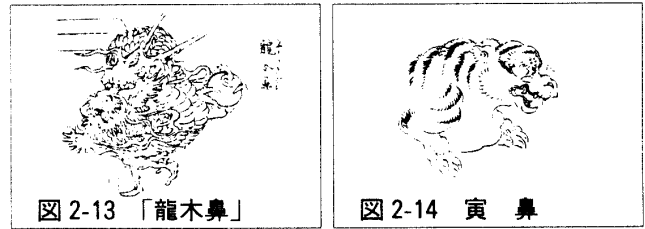


図 2-13 「龍木鼻」

図 2-14 寅 鼻

雑工雛形 (図 2-15~図 2-17)

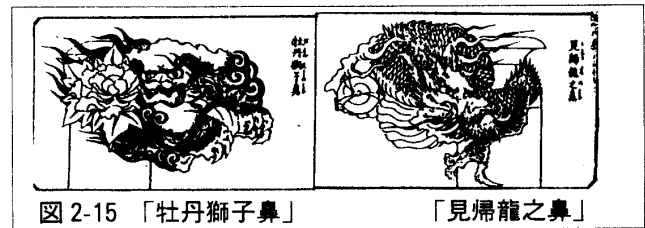


図 2-15 「牡丹獅子鼻」

「見帰龍之鼻」

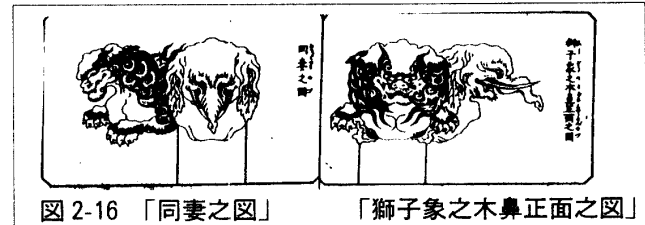


図 2-16 「同妻之図」

「獅子象之木鼻正面之図」



図 2-17 「同妻之図」

「獅子猯之木鼻正面之図」

2) 略象鼻の変遷 (図2-18~2-23参照)

象鼻を平板化し省略した木鼻を略象鼻と呼ぶことができる。略象鼻は「大匠雛形」(1714)「匠家絵様集」(1759)「新撰雛形」(1760)などにみられるが、それ以後の雛形書にはみられなくなる。このことからすれば略象鼻は18世紀中期までの江戸時代前半期に流行したモチーフであると考えることができよう。また「新撰雛

大匠雛形 (図 2-18)

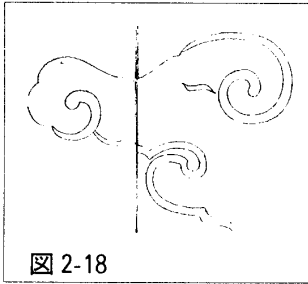


図 2-18

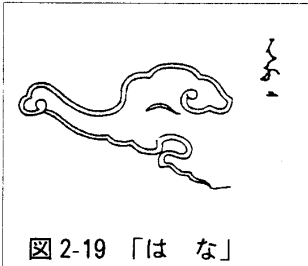


図 2-19 「はな」



図 2-20 「絵様端」

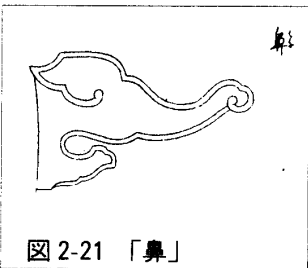


図 2-21 「鼻」

新撰雛形 (図 2-22～図 2-23)

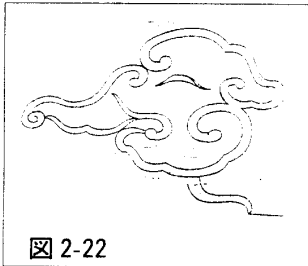


図 2-22

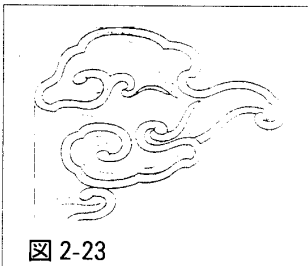


図 2-23

形」における略象鼻はかなり象の形が崩れてきている点を指摘することができる。

3) 天象形・植物形木鼻の変遷 (図2-24～2-26参照)

「大匠雛形」(1714)「匠家絵様集」(1759)「新撰雛形」(1760)までは渦文または木瓜渦文が中心で、虹梁木鼻系の全体の形態は略象鼻のように木鼻の先端が伸びたもの、鳥甲鼻のもの、拳鼻(形が拳様)のものなどがある。渦の巻き方は上から下がって巻く下巻渦と下から上がって巻く上巻渦、さらに下巻渦と上巻渦が組み合わされたものなどがある。「新撰雛形」では小さな若葉が渦に取り付くものも若干みられる。「大和絵様集」(1763)になると略鳳凰鼻が現れ、拳鼻様の渦鼻、略象鼻様の渦若葉鼻がみられる。

「当世いろは絵様集」(1834)では木鼻全体の形態は略鳥鼻様が主流となり、渦は渦文・渦若葉文があり、さらには植物形木鼻として蔓若葉文が新しいデザインとして登場した。また天象形木鼻として新たに雲鼻・波鼻が現れた。「大工絵様雑工雛形」(1850)では「当世いろは絵様集」の内容を踏襲しつつ、雲鶴鼻・波千鳥鼻・波鯉魚鼻など天象形と動物形を組み合わせた木鼻を提案している。また植物形木鼻として菊鼻を新しく登場させている。この雛形書ではモチーフが複合化したより精緻で複雑なデザインを志向しているといえよう。

大匠雛形 (図 2-24～図 2-30)



図 2-24 略象渦鼻

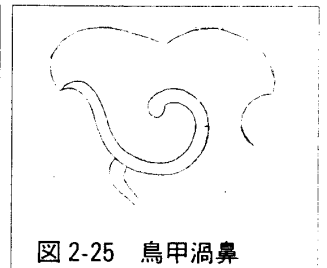


図 2-25 鳥甲渦鼻



図 2-26 鳥甲渦鼻



図 2-27 鳥甲渦鼻



図 2-28 鳥甲渦鼻

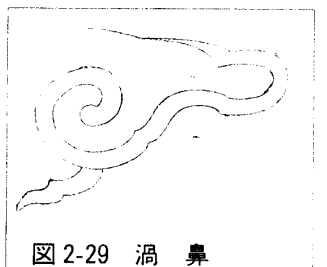


図 2-29 渦鼻

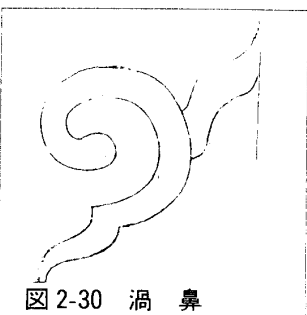


図 2-30 渦鼻

匠家絵様集 (図 2-31~図 2-37)

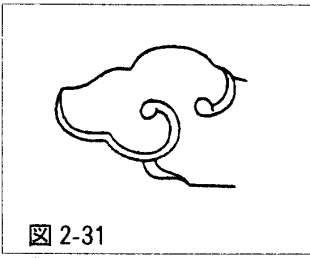


図 2-31

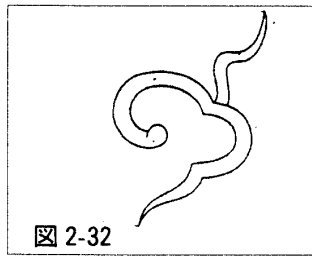


図 2-32

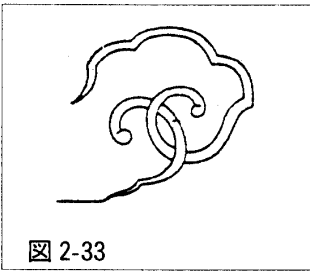


図 2-33

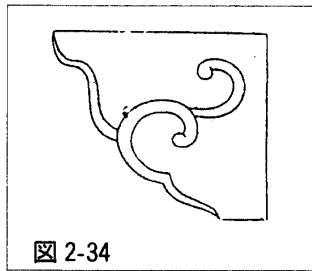


図 2-34

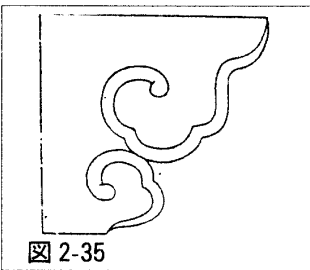


図 2-35

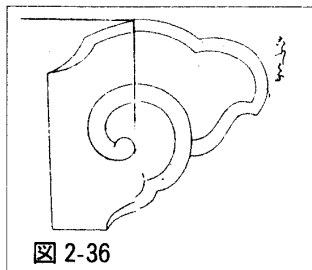


図 2-36

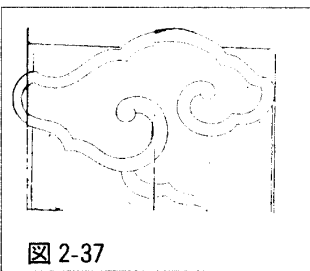


図 2-37

新撰雜形 (図 2-38~図 2-43)

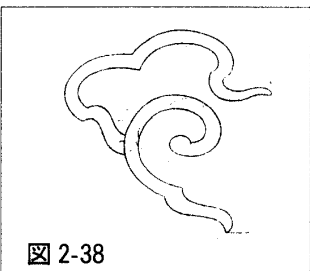


図 2-38

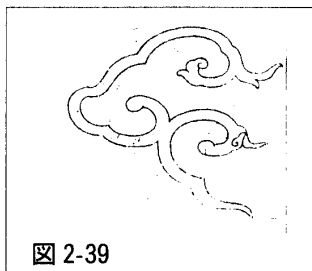


図 2-39

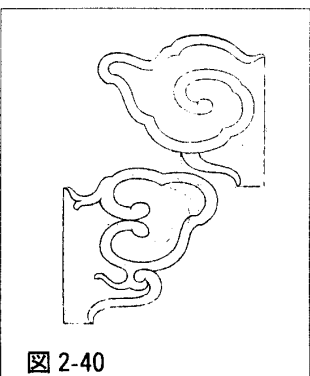


図 2-40

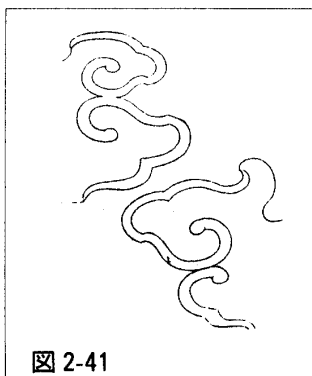


図 2-41

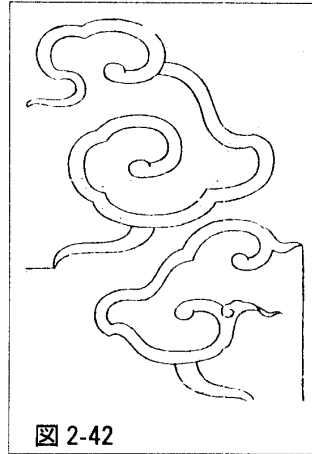


図 2-42

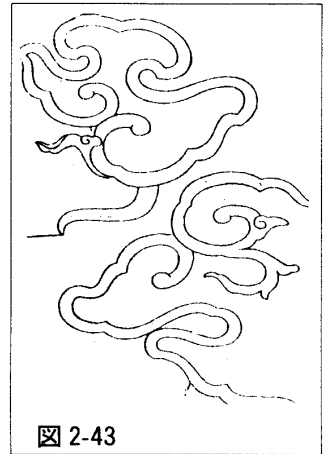


図 2-43

大和絵様集 (図 2-44~図 2-48)

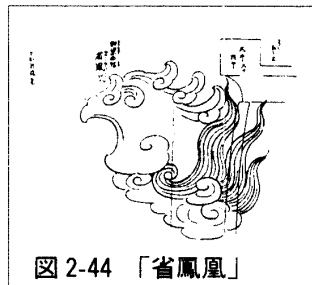


図 2-44 「省鳳凰」

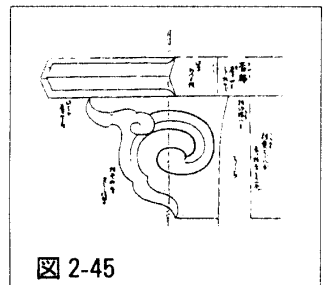


図 2-45

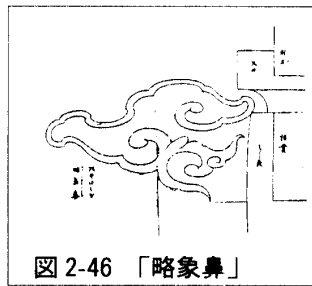


図 2-46 「略象鼻」

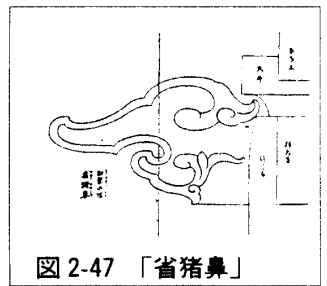


図 2-47 「省猪鼻」

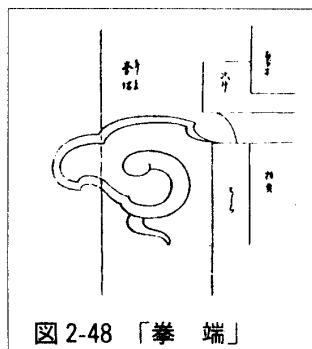


図 2-48 「拳端」

当世いろは絵模集 (図 2-49~図 2-56)

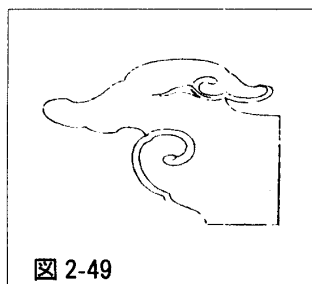


図 2-49

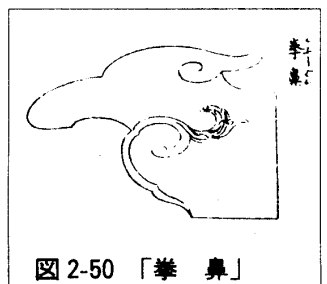


図 2-50 「拳鼻」

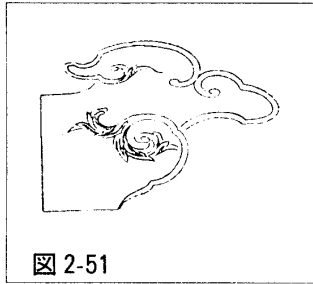


図 2-51

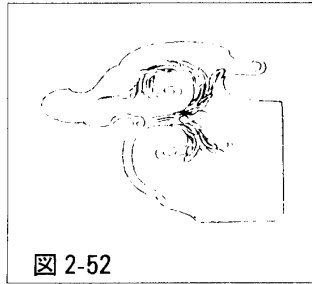


図 2-52



図 2-63 「頭貫之鼻雲図」



図 2-64 「同波に鯉魚之図」

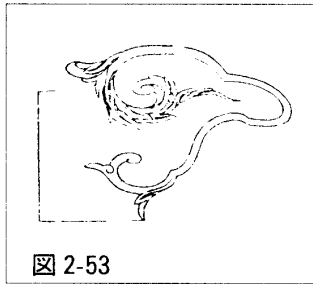


図 2-53

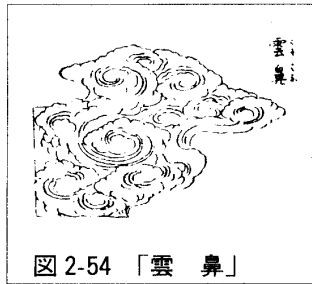


図 2-54 「雲 鼻」

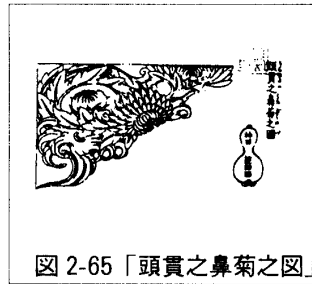


図 2-65 「頭貫之鼻菊之図」



図 2-55 「波之鼻」

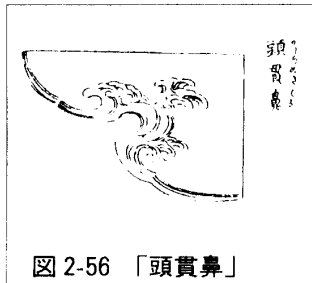


図 2-56 「頭貫鼻」

4) 肘木鼻の変遷 (図2-65~2-69参照)

肘木鼻の絵様の変遷も、大きくいえば基本的に虹梁木鼻・頭貫木鼻と同様の变化であった。

雑工雛形 (図 2-57~図 2-65)

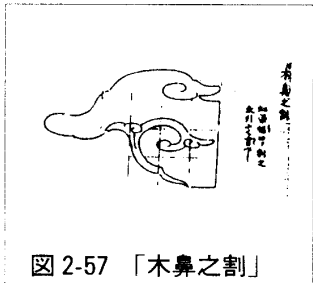


図 2-57 「木鼻之割」

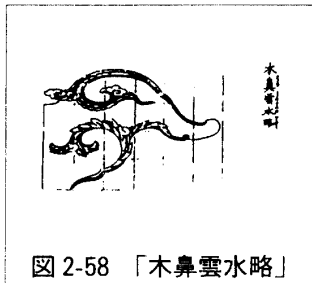


図 2-58 「木鼻雲水略」

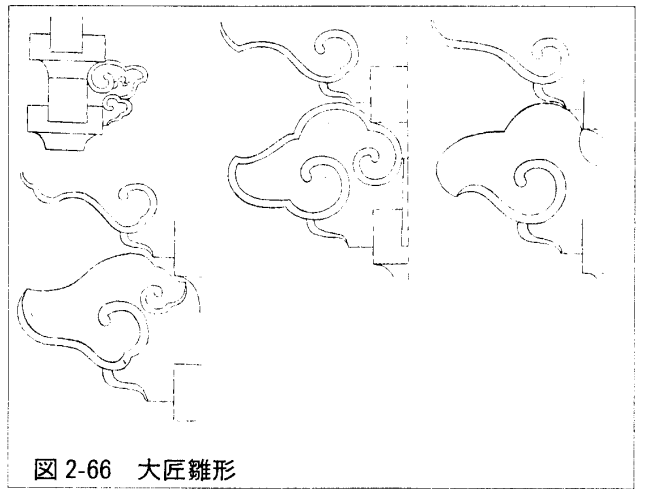


図 2-66 大匠雛形



図 2-59 「雲鶴之木鼻」



図 2-60 「波千鳥之鼻」

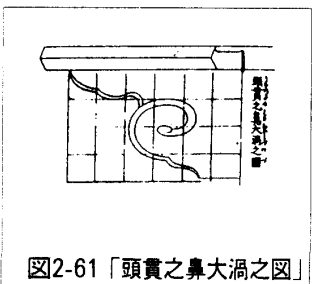


図 2-61 「頭貫之鼻大渦之図」

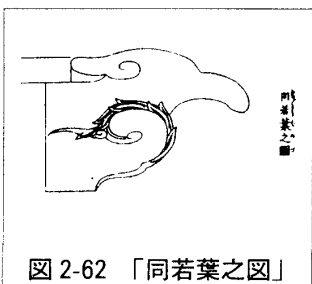


図 2-62 「同若葉之図」

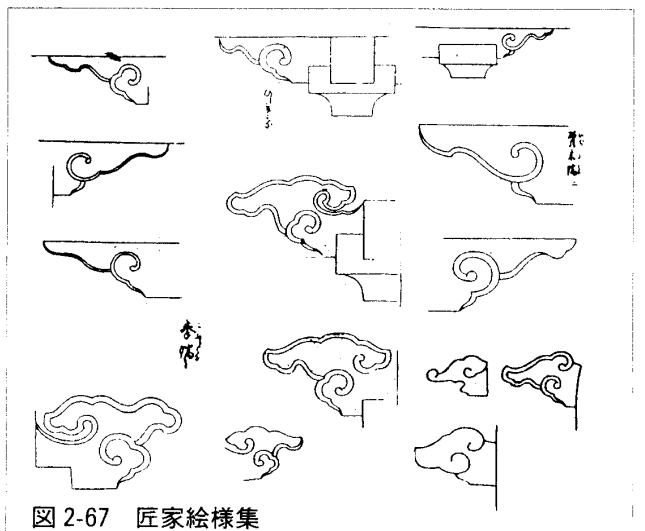


図 2-67 匠家絵様集

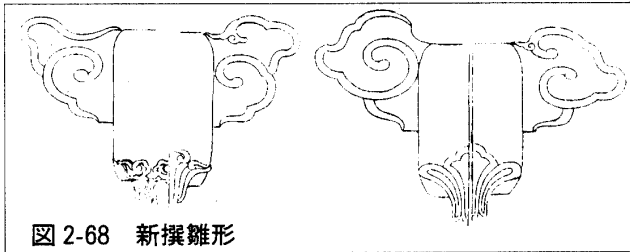


図 2-68 新撰雛形

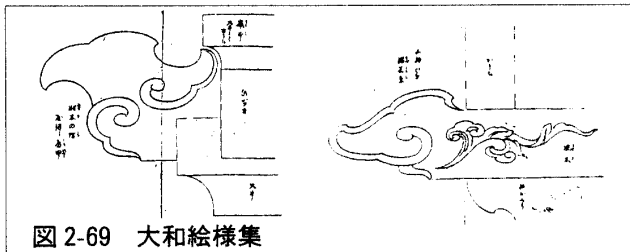


図 2-69 大和絵様集

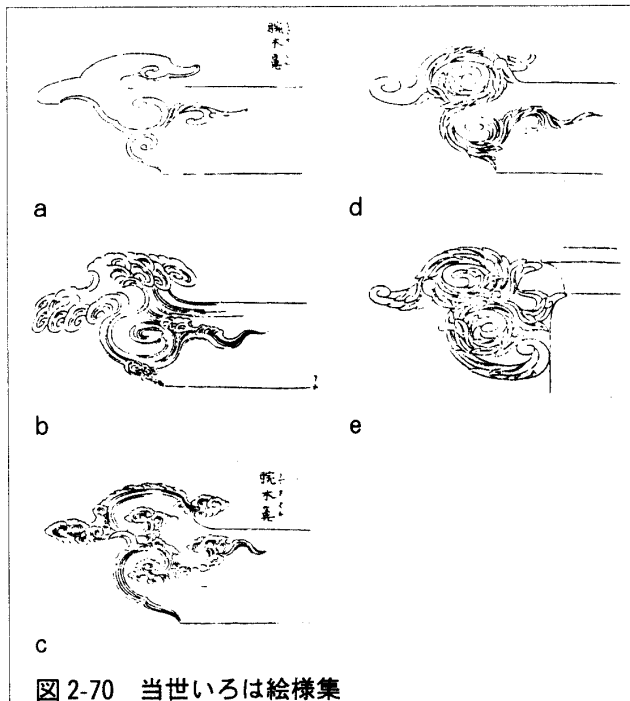


図 2-70 当世いろは絵様集

このように木鼻絵様の変遷を概観すれば以下の点を指摘することができる。18世紀初期から19世紀中期を通して丸彫りの象鼻・獅子鼻・猿鼻が一般的に用いられ、描写は時代が下るにしたがってより繊細になってきている。渦鼻系木鼻の変遷をみると、まず「大匠雛形」(正徳4・1714年)では渦鼻が主流であり、つぎに「新撰雛形」(宝暦9・1759年)において渦若葉鼻がはじめて現れ、さらに「当世いろは絵様集」(天保5・1834年)において蔓若葉鼻・雲鼻・波鼻がはじめて現れるようになった。したがって18世紀初期以後の渦鼻絵様の変遷を概観すれば、渦鼻→渦若葉鼻→蔓若葉鼻というように、

時代が下るにしたがって単純な渦文からまず天象形と植物形が複合して渦若葉文へ、さらに全体が植物化してより複雑な蔓若葉文に変化したといえよう。また19世紀中期には天象形と動物形が複合化した複雑なデザインの木鼻も現れるようになった。

3. 横田氏の建築作品にみる木鼻絵様

横田氏が手がけた建築作品にみられる木鼻絵様を整理すると、表3-1のようになる。この表をみると次のようなことが指摘される。

- a) 略象鼻は菅船神社本殿(文化14・1817年)まで用いられ、それ以降は基本的に使用されなかった⁹⁾。
- b) 向拝に獅子・象鼻が用いられるのは龍穩院本堂(天保2・1881年)からである。
- c) 渦若葉鼻は宝蔵寺客殿(天明2・1782年)から用いられた。
- d) 蔓若葉鼻は蛭沢稻荷神社本殿(文政2・1819年)にはじめて用いられ、明治期に流行する。
- e) 透蔓若葉鼻は子鋤倉神社本殿(嘉永4・1851年)・宇佐八幡神社拜殿(明治23・1890年)の2例に用いられた。また透波鼻は鹿島神社拜殿(明治15・1882年)にのみ用いられた。
- f) 実肘木に渦若葉鼻が用いられたのは、熊倉神社拜殿(明治25・1892年)のみである。
- g) 拳鼻に渦若葉鼻が用いられたのは、宝蔵寺(天明2・1782年)と昌源寺本堂(嘉永2・1849年)の2例のみである。

次に各建築作品の木鼻絵様について概観する。

①菅谷神社本殿(寛保2・1742年)

向拝虹梁鼻(図3-1)は象鼻、身舎梁行頭貫鼻(図3-2)は略象鼻、身舎桁行頭貫鼻(図3-3)および身舎拳鼻・実肘木鼻(図3-4)は渦鼻となっている。ただし身舎桁行頭貫鼻は上巻と下巻の渦が接し、下巻の渦には小さな若葉が付いていて、全体の形は略象鼻のように先端が象の鼻のように延びている。この象鼻は、横田氏の作品の中で最初のものである。

表 3-1 各建物における木鼻一覧

No.	建物名称	建築年代	所在地	堂（本堂・門・鐘楼）					社（本殿・拝殿）						
				身 舎			向 拜		身 舎			向 拜			
				頭貫	実肘木	拳鼻	虹梁	実肘木	頭貫	実肘木	拳鼻	虹梁	実肘木		
01	菅谷神社本殿	寛保 2(1742)年	滝根町菅谷												
02	貝谷観音堂	延享 4(1747)年	滝根町広瀬	渦若葉	渦	渦	獅子	渦	略象・渦	渦	渦	象		渦	
03	普賢寺山門	寛延 2(1749)年	小野新町	渦	渦	渦									
04	宝蔵寺客殿	天明 2(1782)年	滝根町広瀬	略象	渦	渦若葉									
05	法伝寺本堂	文化 2(1805)年	平田村上蓬田	象	渦	渦									
06	菅船神社本殿	文化14(1817)年	平田村上蓬田						略象・渦	渦	渦	象		渦	
07	蝦沢稻荷神社本殿	文政 2(1819)年	相馬郡小高町						渦	渦	渦	雙若葉		渦	
08	龍徳院本堂	天保 2(1831)年	三春町荒町				獅子・象	渦							
09	浮金観音堂	天保 5(1834)年	小野町浮金	渦	渦	渦	獅子・象	渦							
10	地藏院本堂	天保11(1840)年	船引町船引	無	渦	無									
11	昌源寺本堂	嘉永 2(1849)年	梁川町舟生	渦若葉	渦	渦若葉									
12	飯豊神社拝殿	嘉永 4(1851)年	小野町飯豊						渦若葉	渦	渦	獅子・象		渦	
13	子楸倉神社本殿	嘉永 4(1851)年	いわき市平						透雙若葉	渦	渦	獅子・象		渦	
14	満福寺鐘楼	万延 2(1861)年	小野町小戸神	獅子	渦	渦									
15	駒形神社本殿	明治 6(1873)年	平田村駒形											渦	渦
16	鹿島神社拝殿	明治15(1882)年	郡山市西田町						雙若葉	渦	無	透波		渦	渦
17	五斗蒔延命地藏堂	明治22(1889)年	大越町上大越				渦	渦							
18	剛叟寺本堂	明治22(1889)年	滝根町神俣	獅子	渦	渦	渦・略象	渦							
19	宇佐八幡神社拝殿	明治23(1890)年	滝根町広瀬						透雙若葉	渦	渦	獅子・象		渦	
20	熊倉神社拝殿	明治25(1892)年	いわき市川前町						無	渦若葉	無	雙若葉		渦	
21	吉峰神社拝殿	明治31(1898)年	滝根町広瀬						雙若葉	渦	渦	獅子		渦	
22	郎山神社本殿	明治37(1904)年	滝根町菅谷						渦若葉	渦	渦	雙若葉		渦	



②貝谷観音堂（延享4・1747年）

向拝虹梁鼻（図3-5）は獅子鼻，身舎頭貫鼻（図3-6）および拳鼻（図3-7）は上巻と下巻が接している。ただし頭貫鼻の下巻渦の先端に小さな若葉が付き，菅谷神社本殿の頭貫鼻と類似している。この獅子鼻は横田氏の作品の中で最初のものである。

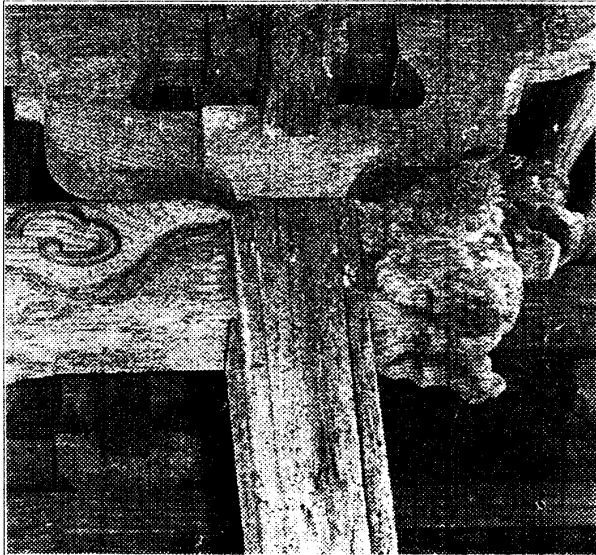


図3-5 向拝虹梁鼻



図3-6 身舎頭貫鼻

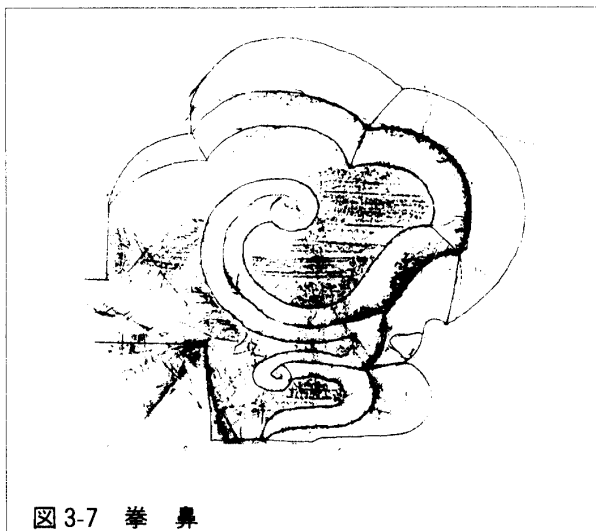


図3-7 拳鼻

③普賢寺山門（寛延2・1747年）

虹梁鼻（図3-8），拳鼻（図3-9）は，上巻渦と下巻渦の組み合わせた渦文であり，実肘木鼻（図3-10）は単純な渦文となっている。拳鼻は「大匠雛形」（正徳4・1714年）の烏甲鼻様の影響を受けているのかもしれない。

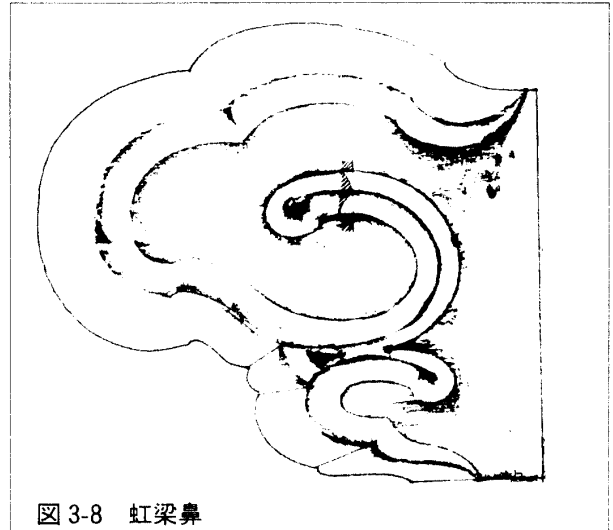


図3-8 虹梁鼻



図3-9 拳鼻



図3-10 実肘木鼻

④宝蔵寺本堂（天明2・1782年）

来迎柱間虹梁鼻（図3-11）は略象鼻であり，菅谷神社本殿の略象鼻に対して髭のように渦若

葉が付いている。来迎柱上の拳鼻（図3-12）は上巻渦と下巻渦が接するところに若葉が付いた渦若葉文である。また実肘木鼻（図3-13）は単純な渦文となっている。



図 3-11 来迎柱間虹梁鼻

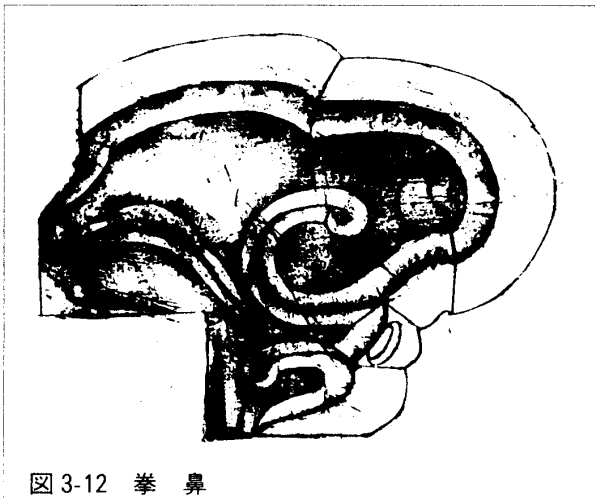


図 3-12 拳 鼻

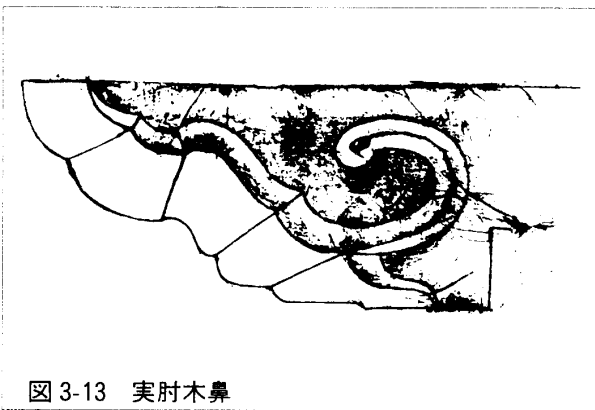


図 3-13 実肘木鼻

⑤法伝寺本堂（文化2・1805年）

来迎柱間虹梁鼻（図3-14）は象鼻であり，拳鼻（図3-15）は単純な渦文，実肘木鼻は木瓜渦文となっている。



図 3-14 来迎柱間虹梁鼻

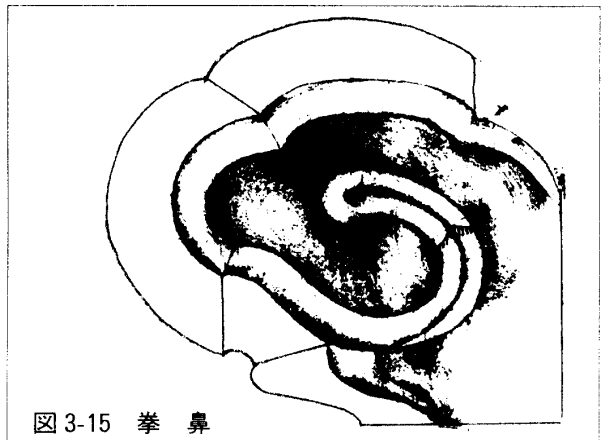


図 3-15 拳 鼻

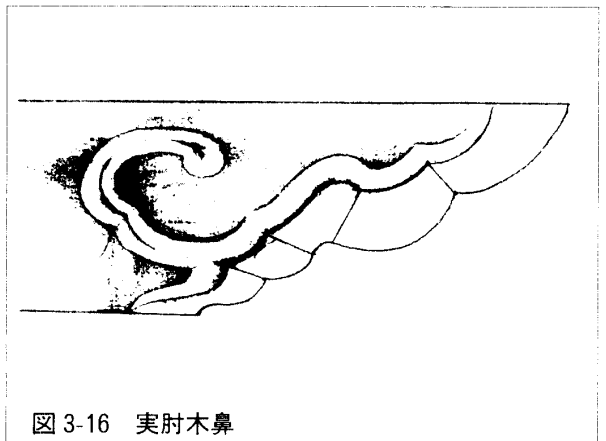


図 3-16 実肘木鼻

⑥菅船神社本殿（文化14・1817年）

向拝水引虹梁鼻は象鼻である。身舎梁行頭貫鼻（図3-17・18）は略象鼻であり，菅谷神社本殿身舎頭貫鼻の略象鼻の耳の部分が若干異なるが，よく似ている。腰組木鼻（図3-19）は上巻と下巻の組み合わせ渦文であり，拳鼻（図3-20）は単純な渦文である。向拝虹梁と身舎頭貫の木鼻のパターンは菅谷神社本殿と同じである。

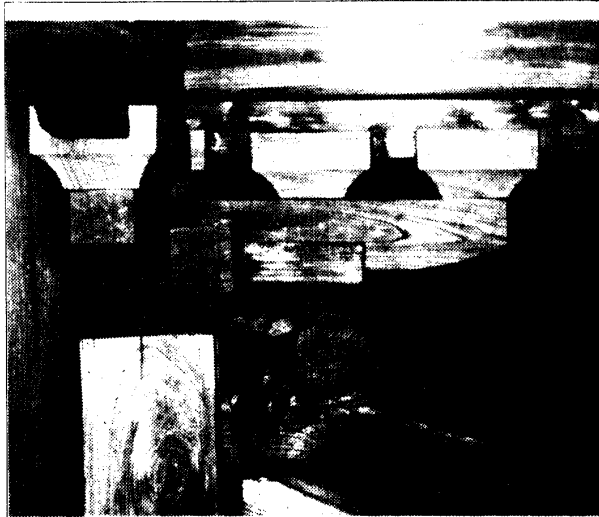


図 3-17 身舎梁行頭貫鼻

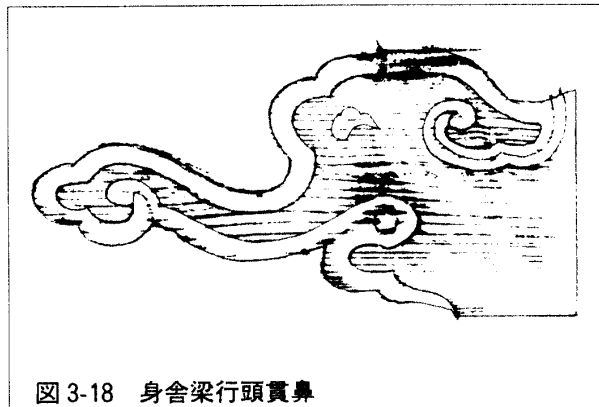


図 3-18 身舎梁行頭貫鼻

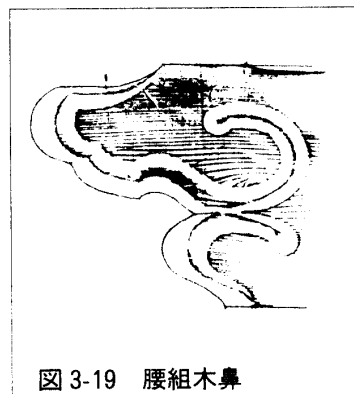


図 3-19 腰組木鼻

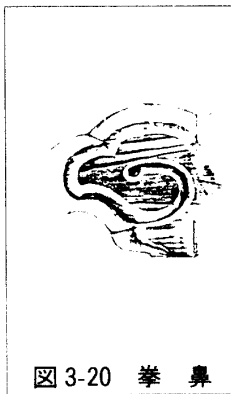


図 3-20 拳鼻

図 3-22~26 の渦および渦目は楕円形になっているが、この時期の特徴である。

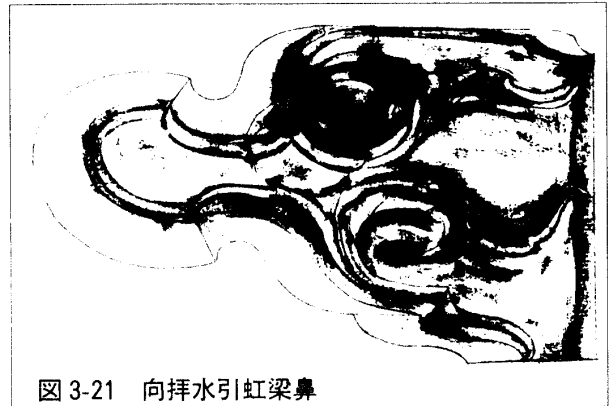


図 3-21 向拝水引虹梁鼻

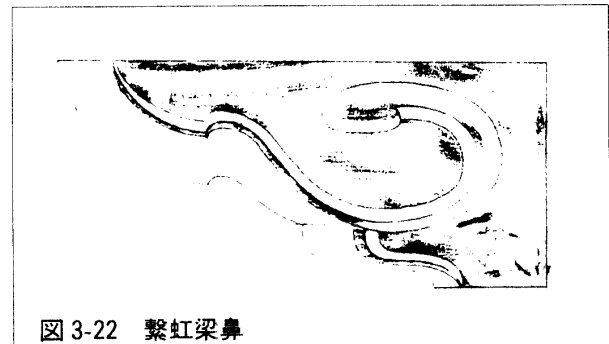


図 3-22 繫虹梁鼻

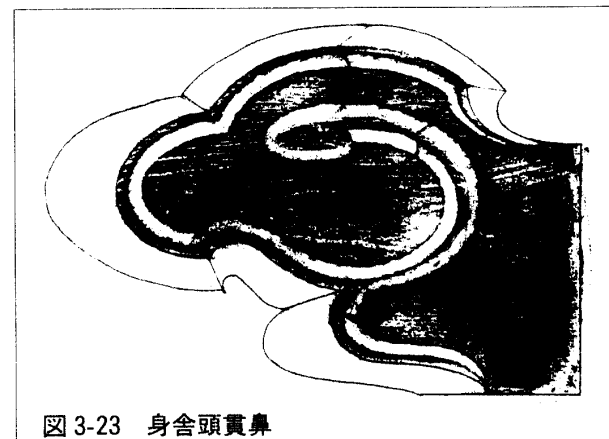


図 3-23 身舎頭貫鼻

⑦ 蛭沢稻荷神社本殿（文政 2・1819年）

向拝水引虹梁鼻（図3-21）は、上巻の渦若葉と下巻の渦若葉がほぼ同じ大きさと組み合わせられたものであり、横田氏の中で渦若葉鼻の最初のものである。向拝と身舎の繫虹梁鼻（図3-22）、身舎頭貫鼻（図3-23）、拳鼻（図3-24）、実肘木鼻（図3-25・26）は単純な渦文となっている。

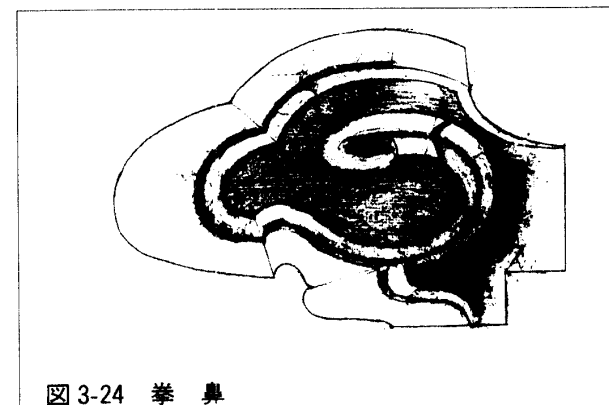


図 3-24 拳鼻

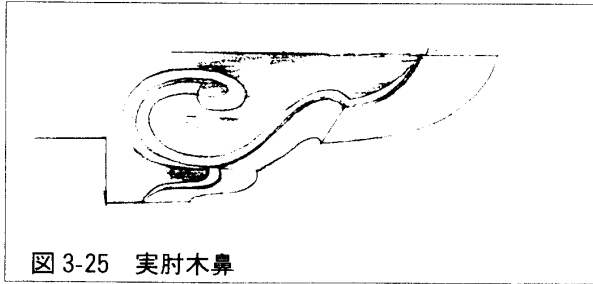


図 3-25 実肘木鼻

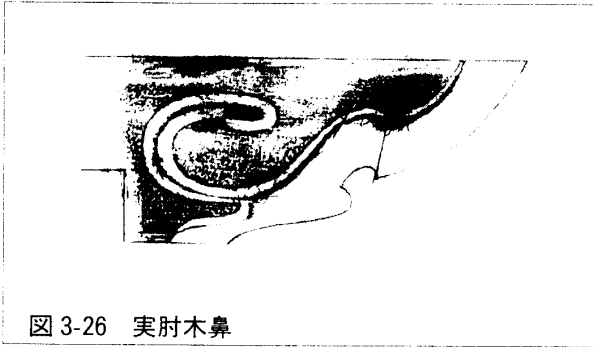


図 3-26 実肘木鼻

文となっている。ただし頭貫鼻の先端部分が鳥鼻のように伸びているのが特徴的である。「当世いろは絵様集」(天保5・1834年)の略鳥鼻様の木鼻との共通性が認められる。

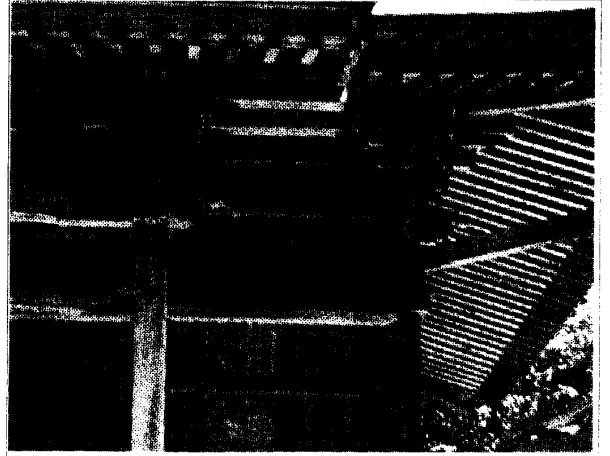


図 3-28 向拝水引虹梁鼻・繫虹梁鼻

⑧龍穩院本堂(天保2・1831年)

向拝水引虹梁鼻は象鼻, 繫虹梁鼻は獅子鼻であり(図3-27), 象鼻・獅子鼻の組み合わせ木鼻は, 横田氏の作品の中でこの例が最初のものである。

象鼻・獅子鼻の組み合わせの場合, 水引虹梁鼻が必ず象鼻になっているが, これは中世において水引虹梁鼻に獅子鼻に先行して略象鼻が用いられたことに起因するのかもしれない。



図 3-27 向拝水引虹梁鼻・繫虹梁鼻



図 3-29 向拝水引虹梁鼻

⑨浮金観音堂(天保5・1834年)

向拝水引虹梁鼻は象鼻, 繫虹梁鼻は獅子鼻であり(図3-28・29), 身舎頭貫鼻(図3-30), 拳鼻(図3-31), 実肘木鼻(図3-32)は単純な渦

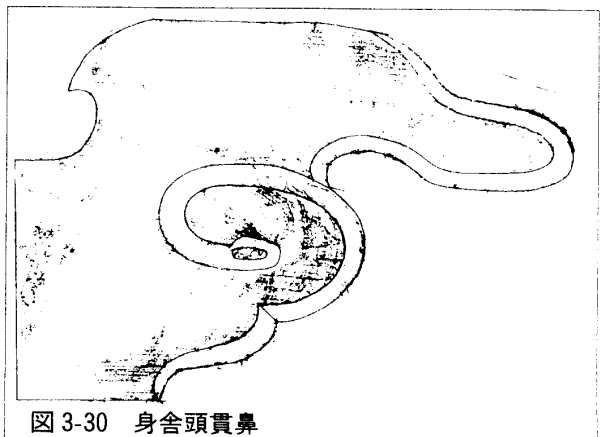


図 3-30 身舎頭貫鼻



図 3-31 拳鼻

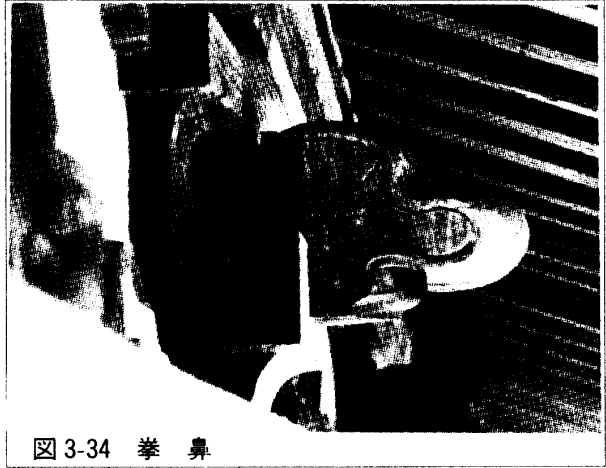


図 3-34 拳鼻

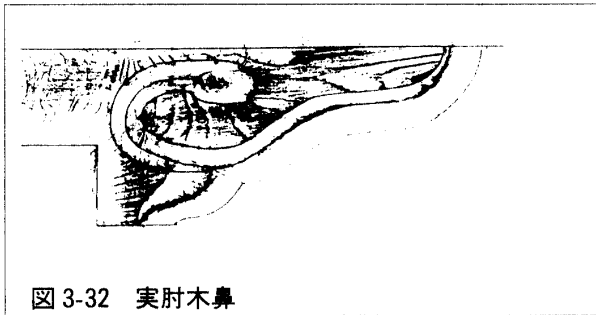


図 3-32 実肘木鼻

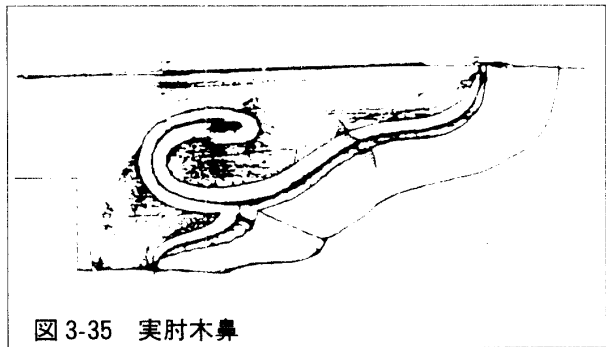


図 3-35 実肘木鼻

⑩昌源寺本堂（嘉永 2・1849年）

来迎柱間頭貫鼻（図3-33）は下巻渦に 3 葉の若葉が付いた渦若葉文である。拳鼻（図3-34）は先端がやや鼻のように延びた形であるが、渦文はみられない。これは浮金観音堂の頭貫鼻にみられる鳥鼻様の特徴を受け継いだものと考えられる。実肘木鼻（図3-35）は単純な渦文である。

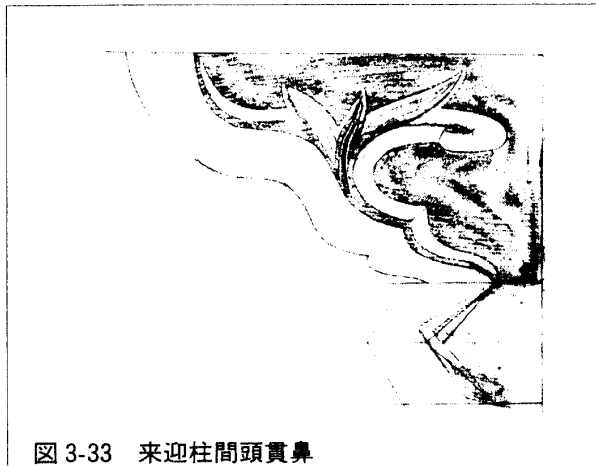


図 3-33 来迎柱間頭貫鼻

⑪飯豊神社拝殿（嘉永 4・1851年）

向拝水引虹梁鼻は象鼻，繫虹梁鼻は獅子鼻であり（図3-36），象鼻と獅子鼻の組み合わせとなっている龍穩院本堂向拝のものより彫刻がやや繊細になり，象の耳がかなり大きくなっていることがわかる。彫工雛形（1827年）の象鼻の耳は大匠雛形（1714年）よりかなり大きくなっているが，飯豊神社の象鼻はこの傾向に従ったものである。身舎頭貫鼻（図3-37）は渦若葉文，拳鼻（図3-38）は渦文となっている。



図 3-36 向拝水引虹梁鼻・繫虹梁鼻

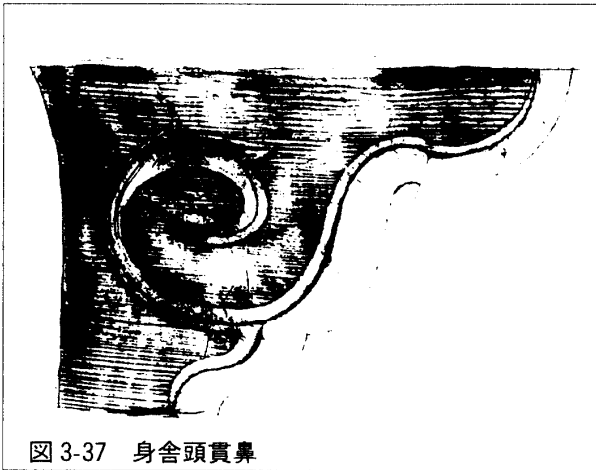


図 3-37 身舎頭貫鼻

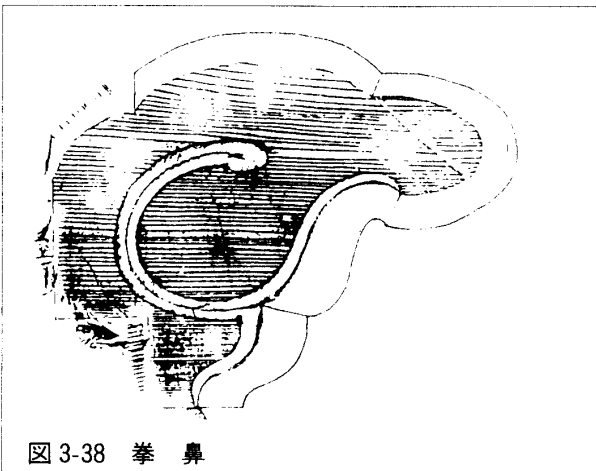


図 3-38 拳 鼻

⑫子鍬倉神社本殿（嘉永4・1851年）

向拝水引虹梁鼻（図3-41）は象鼻，繫虹梁鼻（図3-42）は獅子鼻であり，飯豊神社拝殿の象鼻・獅子鼻によく似ている。身舎頭貫鼻（図3-43）は渦若葉で透彫りとなっている。この透彫り木鼻は，横田氏の作品の中で最初のものである。拳鼻（図3-44・45），実肘木鼻（図3-46）は単純な渦文となっている。

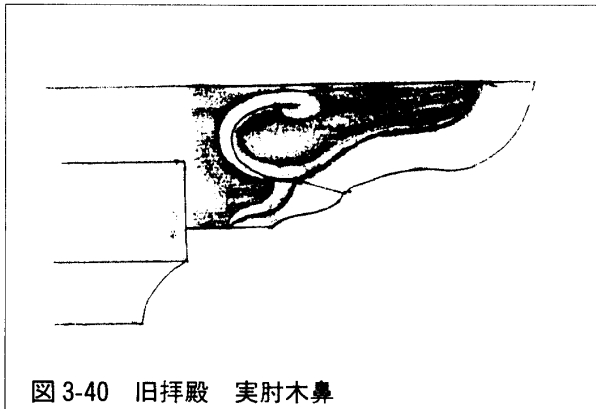


図 3-40 旧拝殿 実肘木鼻



図 3-41 向拝水引虹梁鼻

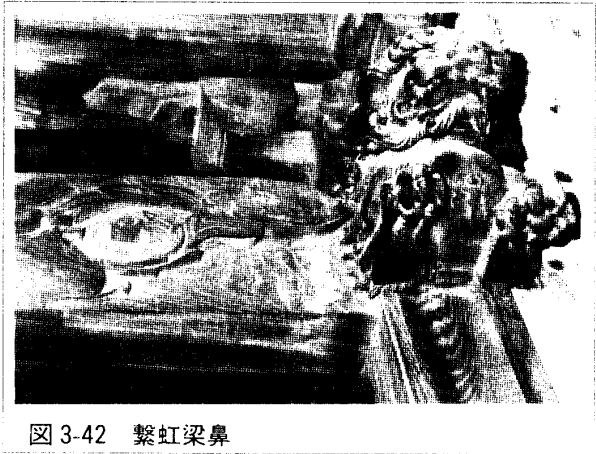


図 3-42 繫虹梁鼻

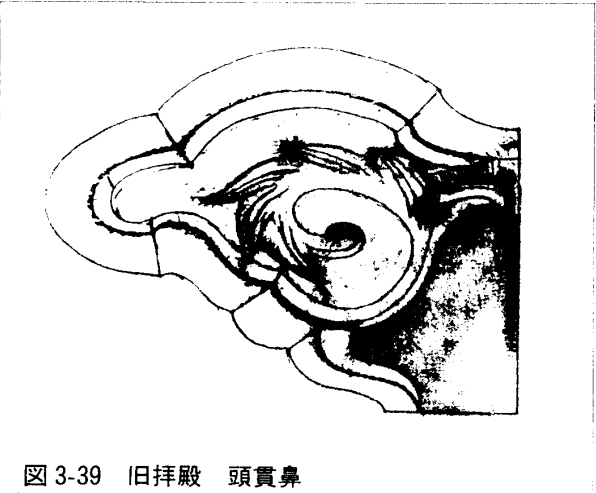


図 3-39 旧拝殿 頭貫鼻

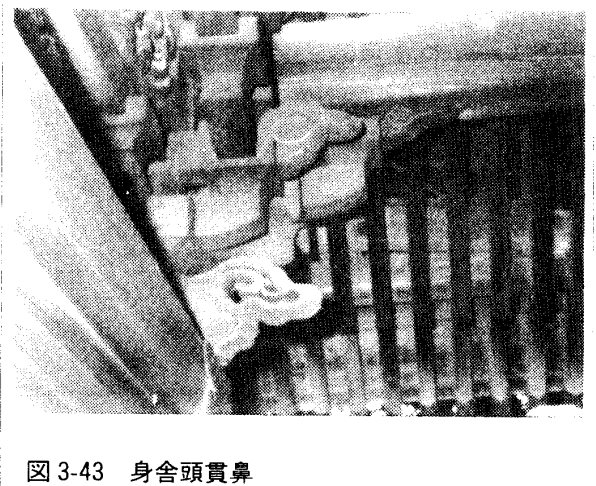


図 3-43 身舎頭貫鼻

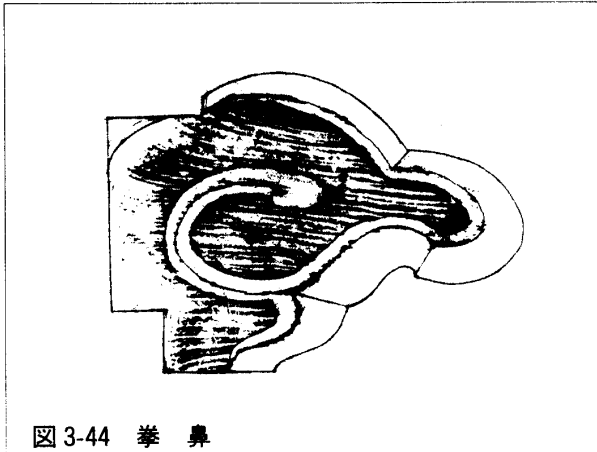


図 3-44 拳 鼻

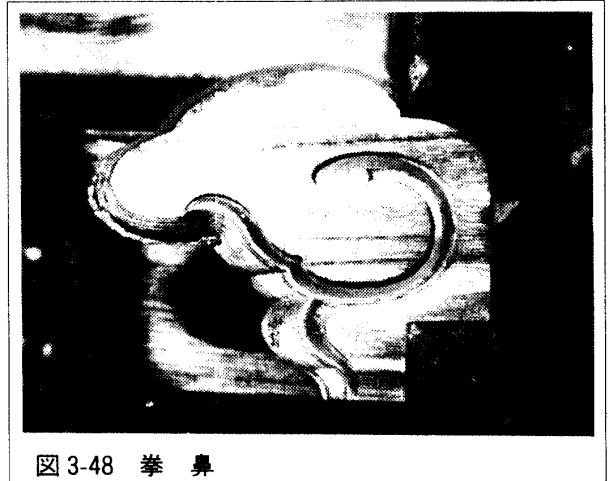


図 3-48 拳 鼻

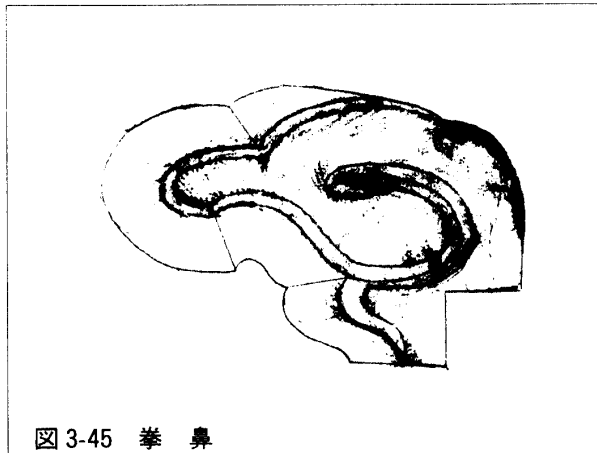


図 3-45 拳 鼻

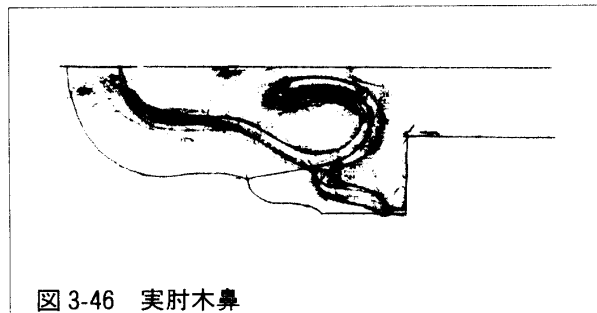


図 3-46 実肘木鼻

⑬満福寺鐘楼（万延2・1861年）

身舎柱頭貫位置の隅方向に獅子鼻（図3-47）が付けられ，拳鼻（図3-48）は単純な渦文となっている．隅方向に取り付く木鼻は，この例が唯一である．

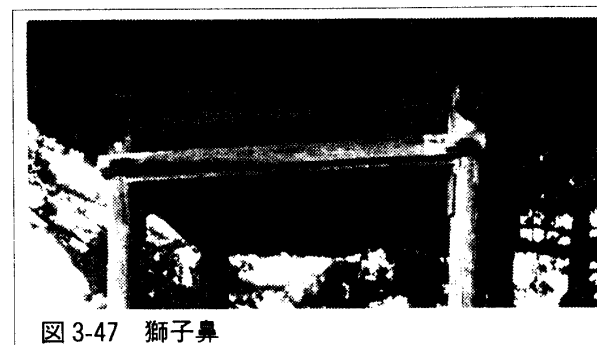


図 3-47 獅子鼻

⑭駒形神社本殿（明治6・1873年）

この本殿は厨子に祀られた小社であるため，向拝水引虹梁鼻（図3-49）に渦文はみられない．この木鼻は昌源寺本堂（1849年）拳鼻によく似ている．計画では，象鼻も考えられた（図4-21参照）が，実際には略象形の木鼻が用いられた．

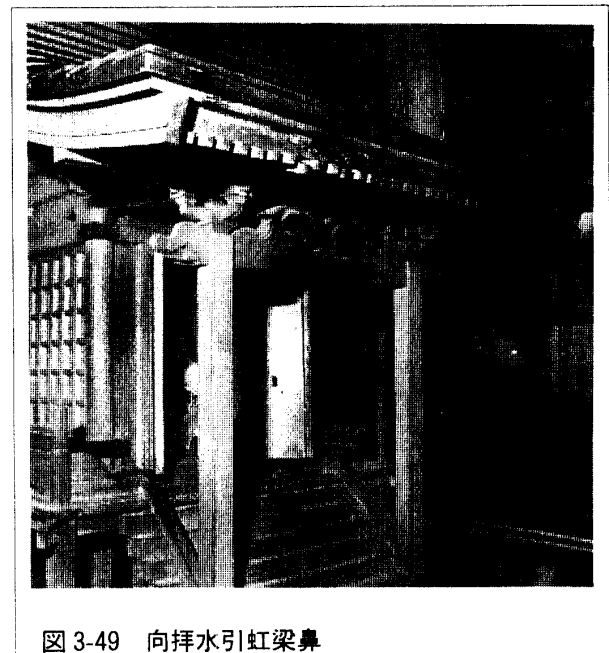


図 3-49 向拝水引虹梁鼻

⑮鹿島神社拝殿（明治15・1882年）

向拝水引虹梁鼻（図3-50）は透彫りの蔓若葉文であり，子歛倉神社本殿頭貫鼻と類似している．身舎頭貫鼻（図3-51）は透彫りの波文であり，実肘木鼻（図3-52）は単純な渦文となっている．

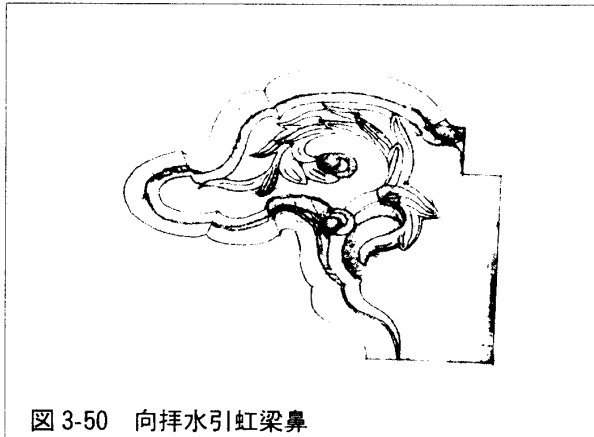


図 3-50 向拝水引虹梁鼻

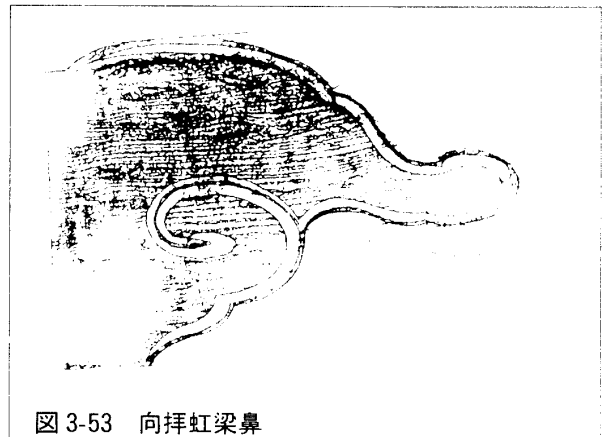


図 3-53 向拝虹梁鼻

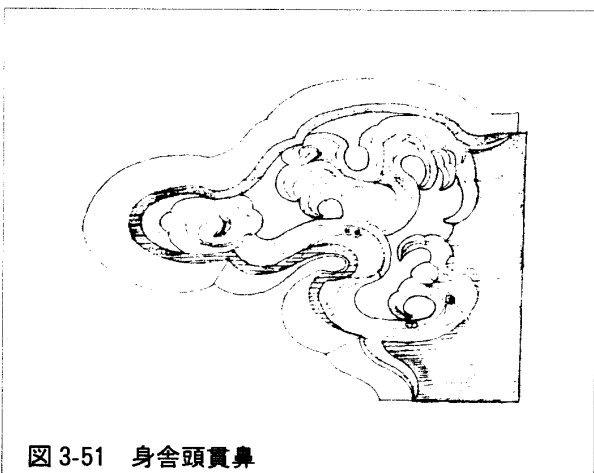


図 3-51 身舎頭貫鼻



図 3-52 実肘木鼻

⑰剛叟寺本堂（明治22・1889年）

向拝虹梁鼻（図3-54）は略象鼻，繫虹梁鼻（図3-55）は単純な渦文となっている。また内外陣境の柱頭の木鼻は獅子鼻（図3-57）であり，二手先組物の拳鼻・実肘木は単純な渦文となっている。向拝虹梁鼻に略象鼻，繫虹梁鼻に拳鼻様の渦鼻を用いるなど全体的に復古調のデザインである。

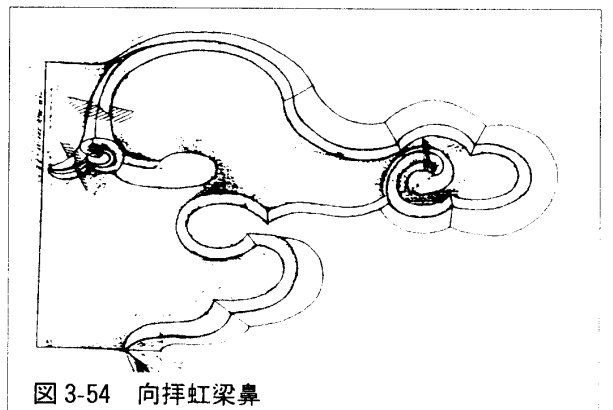


図 3-54 向拝虹梁鼻

⑱五斗蔭延命地藏堂（明治22・1889年）

向拝虹梁鼻（図3-53）は単純な渦文であり，先端が鼻のように延びた木鼻の形は当世風であるが，渦文は浮金観音堂（天保5・1834年）の身舎頭貫鼻に類似していて，復古調である。また，下から巻き上がる渦文は，他に浮金観音堂身舎頭貫鼻にみられるだけで，数少ない例の1つである。

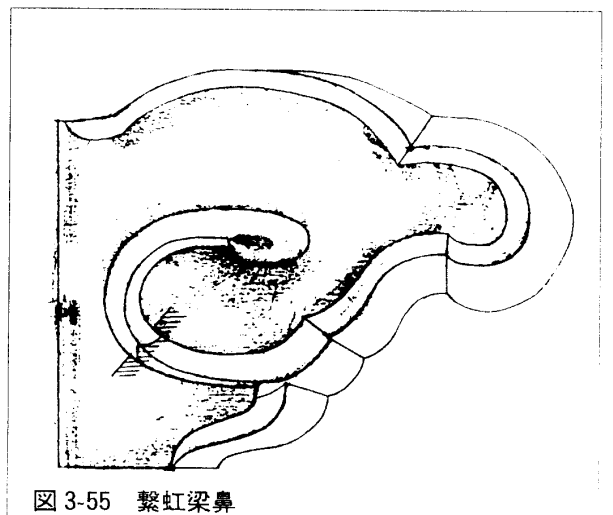


図 3-55 繫虹梁鼻

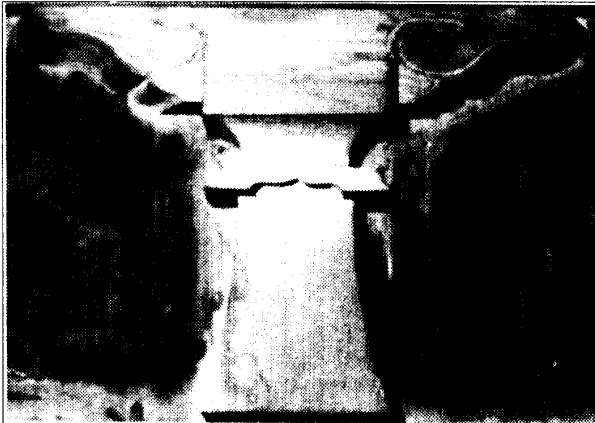


図 3-56 実肘木鼻



図 3-59 身舎頭貫鼻



図 3-57 獅子鼻

⑱宇佐八幡神社拝殿（明治23・1890年）

向拝水引虹梁鼻は象鼻，繫虹梁鼻は獅子鼻であり（図3-58），かなり繊細な彫りとなっている。身舎頭貫鼻（図3-59）は透彫りの蔓若葉文であり，子鍛倉神社本殿・拝殿（嘉永4・1851年）頭貫鼻が初出であるが，横田氏の明治期の木鼻の特徴を示している。



図 3-58 向拝水引虹梁鼻・繫虹梁鼻

⑲熊倉神社拝殿（明治25・1892年）

向拝水引虹梁鼻（図3-60），繫虹梁鼻（図3-61）はほぼ同じ大きさの上巻蔓若葉と下巻蔓若葉が組み合わされ，水引虹梁の方が木鼻先端がやや延びている。図3-60 向拝水引虹梁鼻は雑工雛形（嘉永3・1850年）図2-58「木鼻雲水略」に類似している。身舎絵様肘木鼻（図3-62）は渦若葉文，実肘木鼻（図3-63・64）は渦文であり，復古調である。身舎絵様肘木鼻の絵様は五斗蒔地蔵堂（明治22・1889年）の虹梁絵様に類似している（注1）参考文献所収 図122-1（561）参照

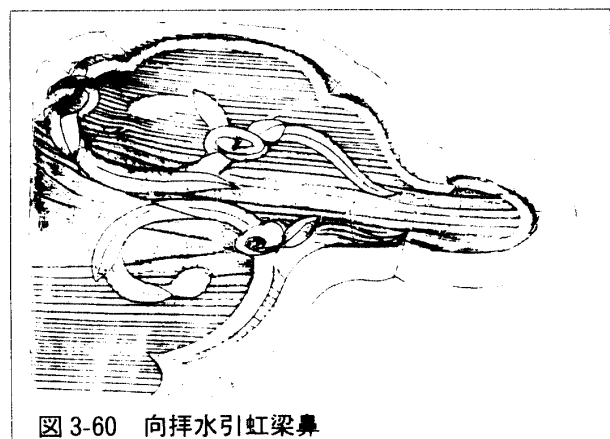


図 3-60 向拝水引虹梁鼻

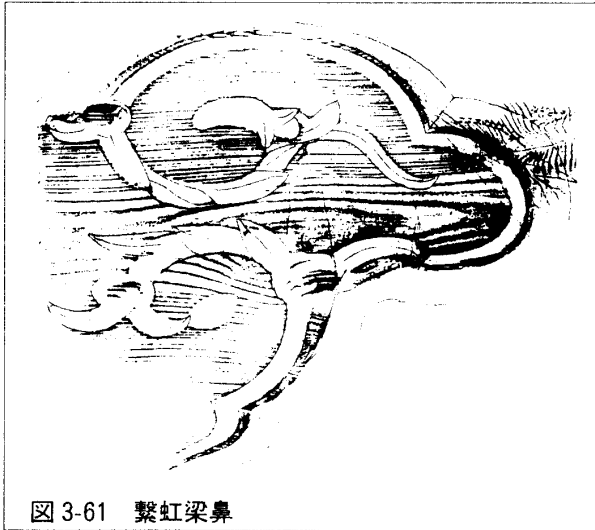


図 3-61 繫虹梁鼻

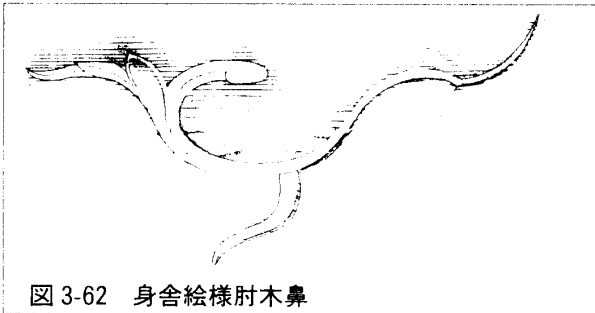
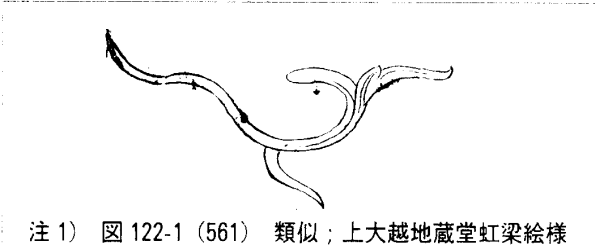


図 3-62 身舎絵様肘木鼻



注 1) 図 122-1 (561) 類似; 上大越地藏堂虹梁絵様



図 3-63 実肘木鼻

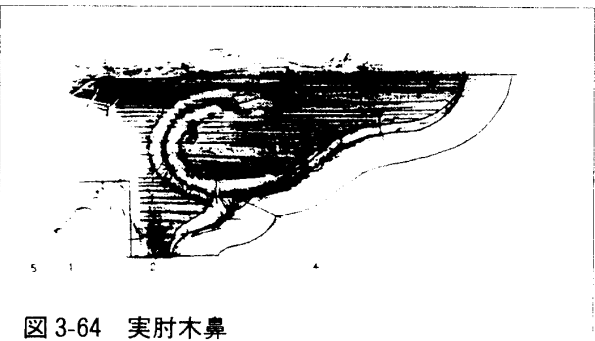


図 3-64 実肘木鼻

⑳古峯神社拝殿 (明治31・1898年)

向拝水引虹梁鼻 (図3-65) は振面獅子鼻である。身舎頭貫鼻 (図3-66) は透彫りの蔓若葉文であり、他に子鋏倉神社拝殿・本殿 (1851年) 頭貫鼻, 鹿島神社拝殿 (1882年) 水引虹梁鼻, 宇佐八幡神社拝殿 (1890年) 頭貫鼻などがあり, 横田氏の明治期木鼻の特徴をもっている。また拳鼻 (図3-67), 実肘木鼻 (図3-68) は単純な渦文であり, 復古調である。

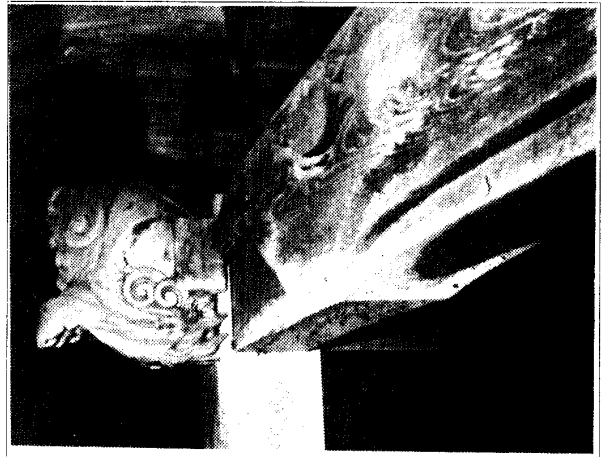


図 3-65 向拝水引虹梁鼻

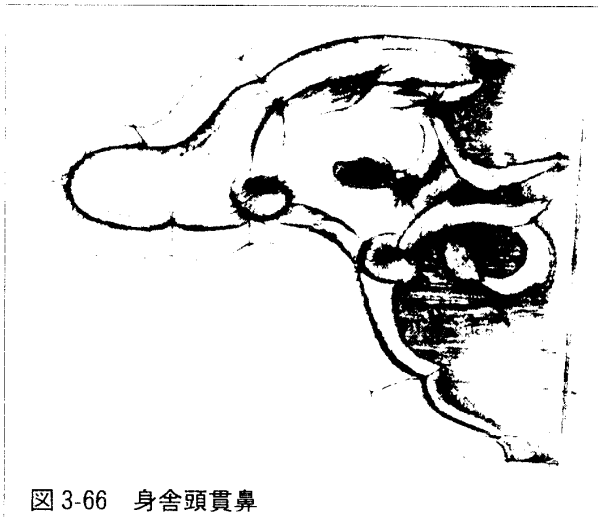


図 3-66 身舎頭貫鼻

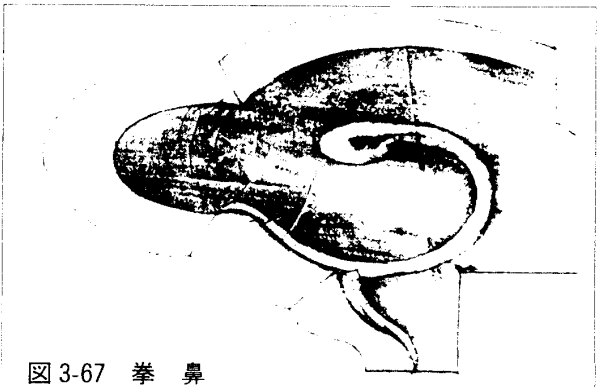


図 3-67 拳鼻

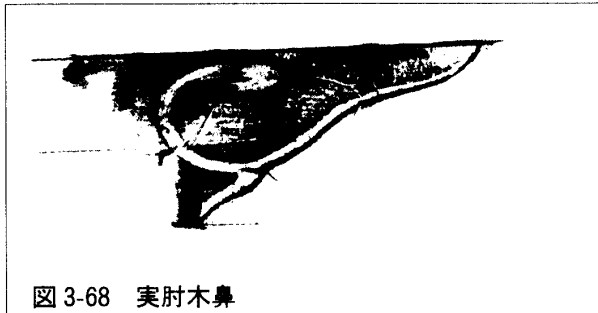


図 3-68 実肘木鼻

②郎山神社本殿（明治37・1904年）

向拝水引虹梁木鼻（図3-69）は蔓若葉文であり、身舎頭貫鼻（図3-70）は渦若葉文となっている。



図 3-69 向拝水引虹梁鼻



図 3-70 身舎頭貫鼻

以上の分析を踏まえて横田氏が手がけた建築作品にみられる木鼻絵様を時間的に分ければ、3期に大きく分けることができる。もちろんこの分け方は第1期：初代・2代杵左衛門が活躍した時代（寛保2・1742～文政元・1818）、第2期：3代・4代杵左衛門が活躍した時代（文政2・1819～明治元・1868）、第3期：5代・6代杵左衛門が活躍した時代（明治2・1869～大正15・1927）を基本にしている⁹⁾。それぞれの時代の特徴を記せば次のようになる。

第1期：渦鼻が主流であり、渦若葉鼻が出現する。また獅子鼻や象鼻のように丸彫り木鼻が単独に用いられた。

第2期：蔓若葉鼻または獅子鼻・象鼻が出現し、向拝は獅子鼻・象鼻が主流となる。

第3期：透波・透蔓若葉鼻が出現し、蔓若葉鼻が主流となる。

この変化は概観すれば、渦鼻→渦若葉鼻→蔓若葉鼻ということになり、遺構にみる木鼻絵様の方がやや時間的に遅れるものの、雛形書にみる木鼻絵様とほぼ同時代的に変遷している。

4. 横田家文書にみる木鼻絵様

横田家大工文書における木鼻絵様は29点を数えるが、このうち拳鼻3点、腕木鼻1点、絵様肘木鼻1点を除く24点はすべて頭貫鼻または虹梁鼻である。

頭貫鼻または虹梁鼻は、渦鼻4点、渦若葉鼻2点、蔓若葉鼻4点、雲鼻1点、略象鼻5点、象鼻6点、獅子鼻3点となっている。

これらの木鼻絵様図を横田氏が手がけた建築作品の木鼻絵様と比較すると、渦鼻である図4-3・4は普賢寺山門虹梁木鼻（寛延2・1749）に類似し、渦若葉鼻の図4-6は子鋤倉神社拝殿頭貫木鼻（嘉永6・1853）、蔓若葉鼻の図4-7～9は子鋤倉神社本殿の頭貫木鼻であることが判明した。また略象鼻の図4-11・12は菅船神社本殿、図4-13は宝蔵寺本堂の水引虹木鼻であることが判明し、これに類似した絵様図として図4-14・15がある。象鼻は遺構として菅谷神社本殿・法伝寺本堂・龍稔院本堂・浮金観音堂・飯豊神社拝殿・子鋤倉神社本殿・宇佐八幡神社拝殿などに用いられたが、駒形神社本殿水引虹梁木鼻の絵様図以外は特定できなかった。ただし図4-16～18は菅谷神社本殿水引虹梁木鼻に類似している。

渦鼻に注目すると、18世紀中期は図4-1・2のように単純な渦であったが、19世紀初期には図4-5のように渦に若葉が付き、19世紀中期には図4-6～9のように若葉または蔓若葉になって、

より複雑な絵様になっていったと考えられる。
 また実際の横田氏の建築作品にはみられなかったが、明治初期に描かれたと思われる雲鼻（図4-10）がある。

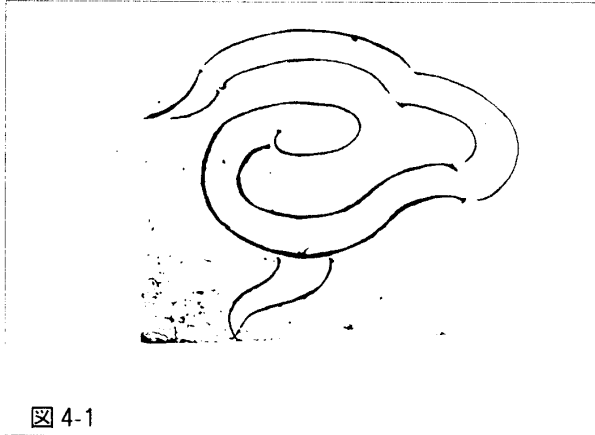


図 4-1

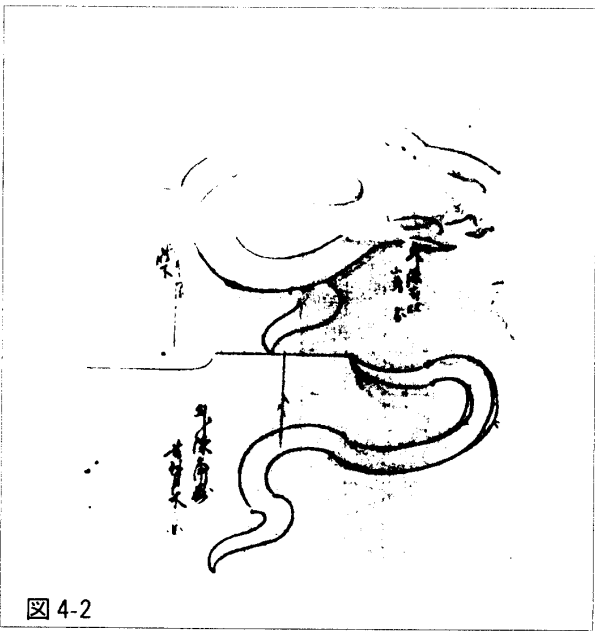


図 4-2

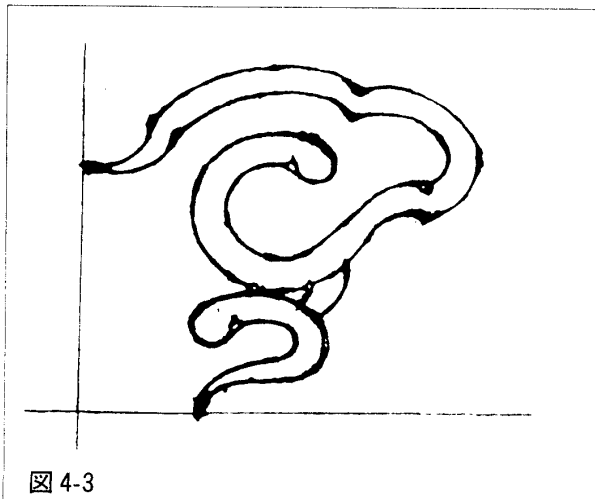


図 4-3

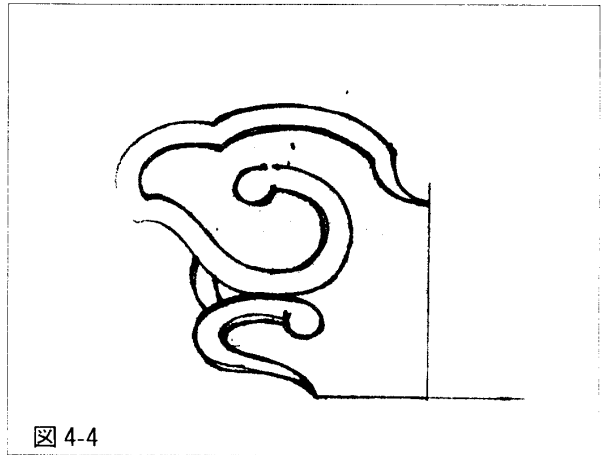


図 4-4

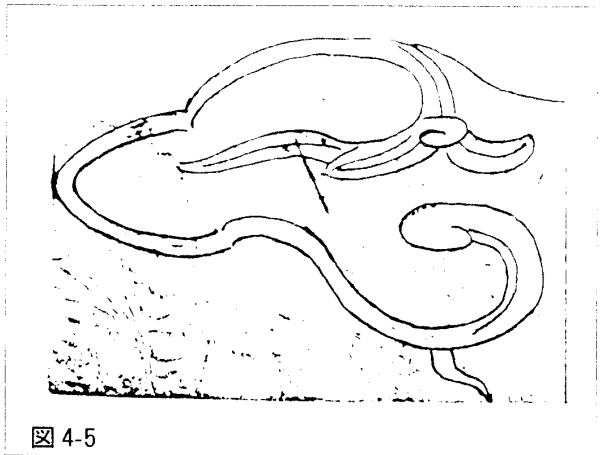


図 4-5



図 4-6 子楯倉神社拝殿 頭貫木鼻



図 4-7 子楯倉神社本殿 頭貫木鼻



図 4-8 子鍬倉神社本殿 頭貫木鼻

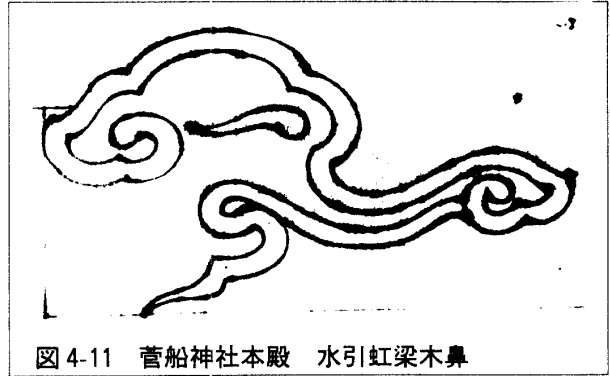


図 4-11 菅船神社本殿 水引虹梁木鼻

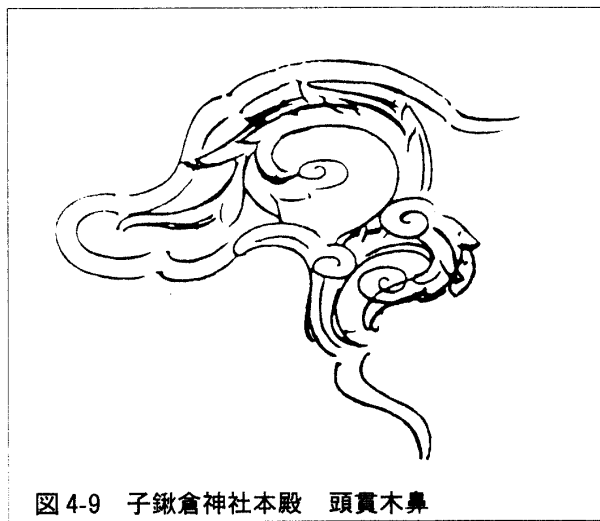


図 4-9 子鍬倉神社本殿 頭貫木鼻



図 4-12 菅船神社本殿 水引虹梁木鼻

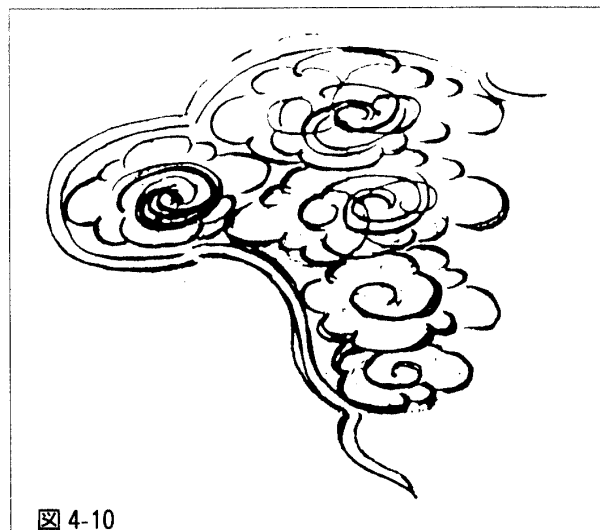


図 4-10



図 4-13 宝蔵寺本堂 水引虹梁木鼻

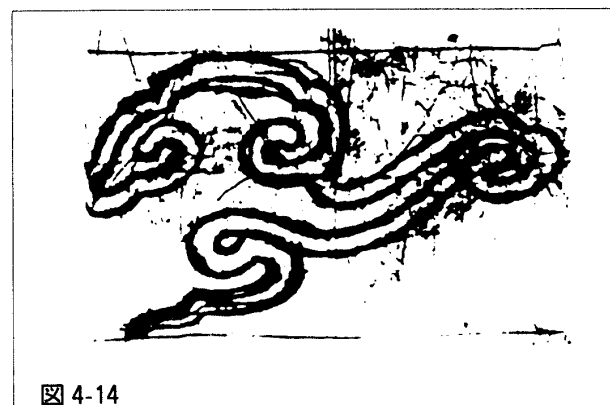


図 4-14

図4-11～15は略象鼻であり、遺構との比較から菅船神社本殿の木鼻と類似し、19世紀初期の作図であろう。図4-13・15には若葉が髭のように付けられているが、この例は遺構では宝蔵寺本堂（天明2・1782年）にみられる。

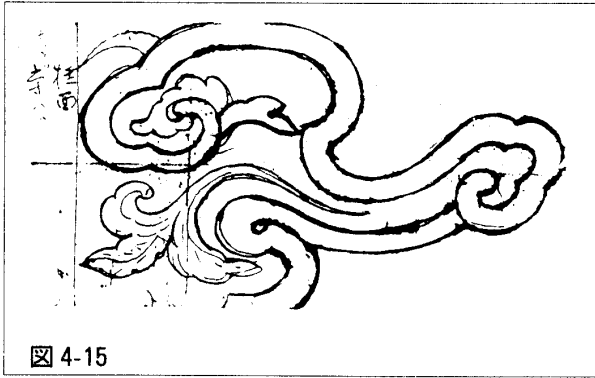


図 4-15

図4-16～20の象鼻は菅谷神社本殿（寛保2・1742年）の象鼻に類似していることから、18世紀中期の作図であろう。

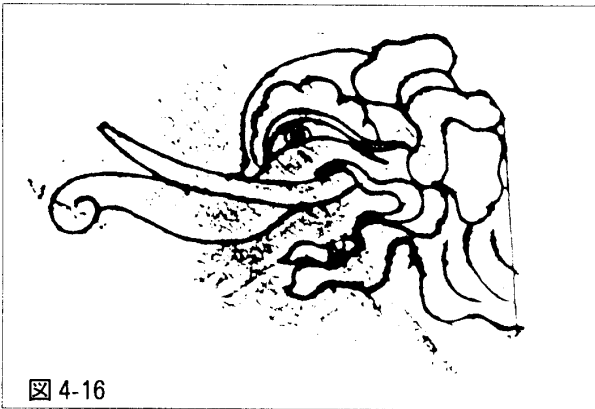


図 4-16

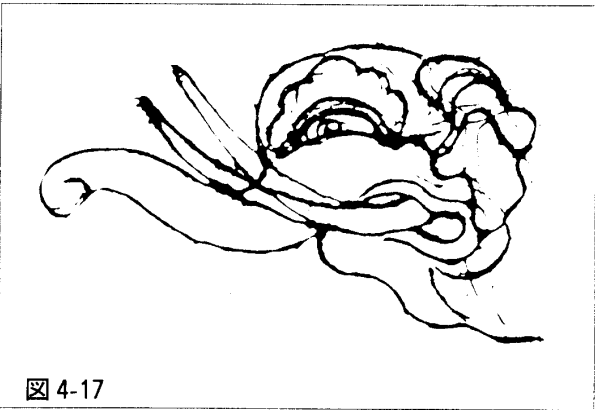


図 4-17

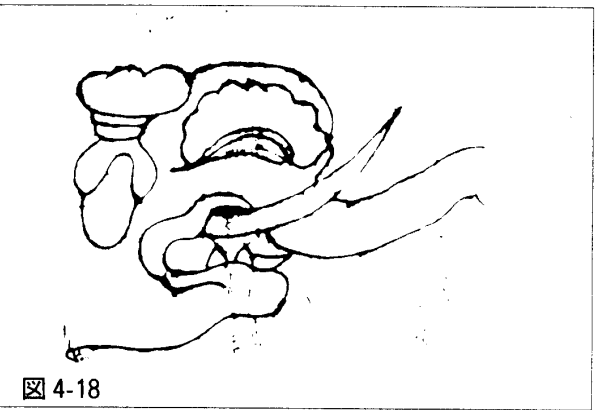


図 4-18

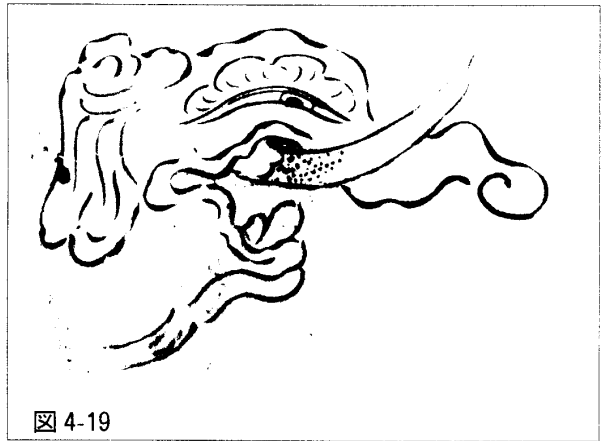


図 4-19



図 4-20

図4-21は駒形神社本殿（明治6・1873年）の象鼻であり、飯豊神社拝殿（嘉永4・1851年）・子鋏倉神社本殿（嘉永4・1851年）の象鼻に類似し、19世紀後期に用いられた。18世紀中期の象鼻との大きな違いは、耳の大きさであり、後者の方が大きくなっていることがわかる。

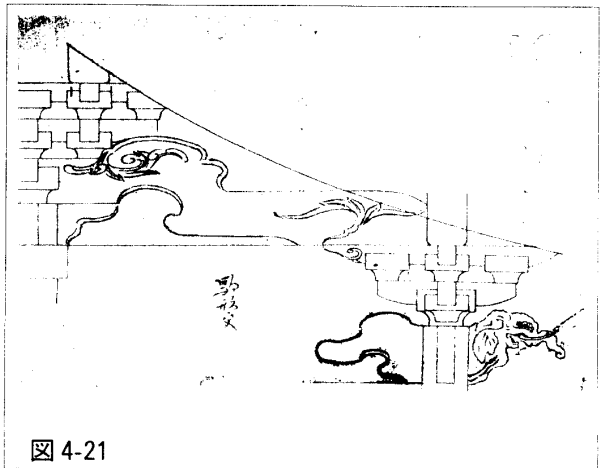


図 4-21

図4-22の獅子鼻は龍穩院本堂（天保2・1819年）向拝の獅子鼻と類似し，図4-23・24の獅子鼻は飯豊神社拝殿のものと類似し，後者の彫りがより繊細になっていることがわかる。



図 4-22

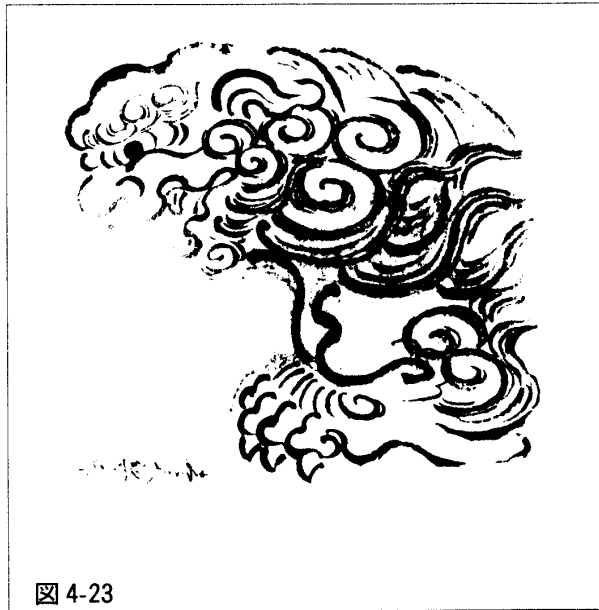


図 4-23



図 4-24 「唐獅子木鼻」

肘木鼻の変化も虹梁・頭貫鼻と同じであり，単純な渦鼻（図4-25昌源寺本堂，1832年）から渦若葉（図4-27）へ，さらに蔓若葉（図4-28子鍬倉神社，1851年）へと変化していることがわかる。

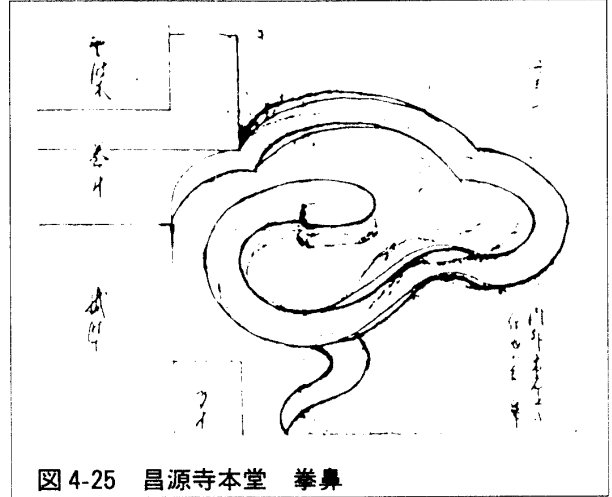


図 4-25 昌源寺本堂 拳鼻

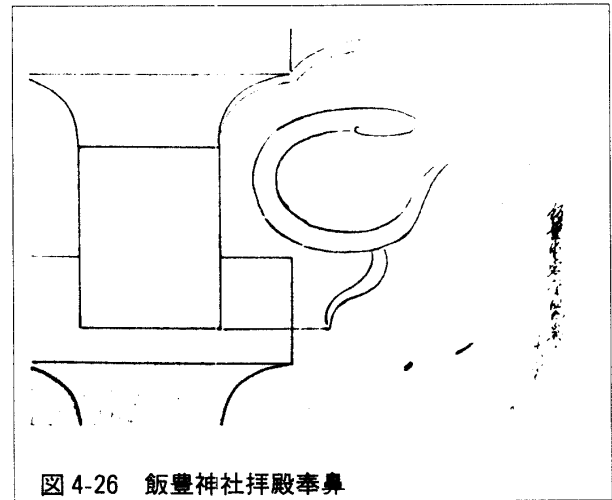


図 4-26 飯豊神社拝殿拳鼻



図 4-27 「神宅殿大臂木鼻」

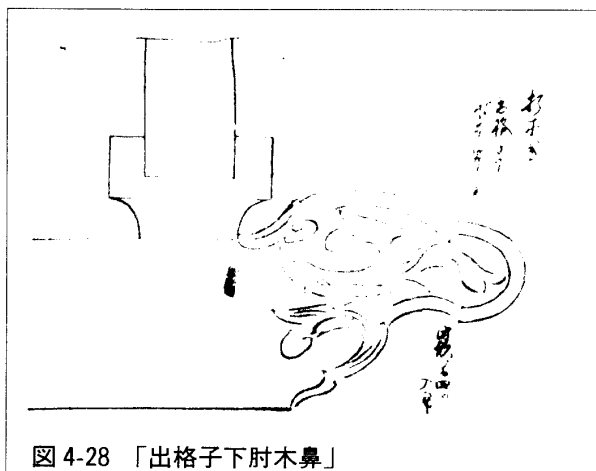


図 4-28 「出格子下肘木鼻」



図 4-29

このように、横田家文書にみる木鼻絵様は遺構にみる木鼻絵様の変遷と同じく渦鼻→渦若葉鼻→蔓若葉鼻と変化したことがみてとれるといえよう。

ところで絵様図の中の図4-29に注目すると、この絵様は「当世いろは絵様集」(天保5年)の図2-70-aに酷似していることがわかる。同様に、図4-7～9の絵様図は「当世いろは絵様集」の図2-52に、また図4-10の絵様図は「当世いろは絵様集」の図2-54に類似していることがわかる。このことからだけで早計に結論を導き出すことはできないが、横田氏は、江戸の先進的な絵様を「当世いろは絵様集」のような雛形本から学び、その上で図案を考案していたことも考えられる⁷⁾。

5. 結 論

これまでの考察を要約すると以下のような

- (1) 雛形書における木鼻絵様を分類すれば、部位(頭貫鼻・虹梁鼻・肘木鼻・腕木鼻・破風尻鼻)、形状(動物形・植物形・天象形)、彫り方(平彫り・丸彫り)に分けられる。
- (2) 雛形書における木鼻絵様は18世紀初期から19世紀中期を通して丸彫りの象鼻・獅子鼻・猿鼻が一般的に用いられ、描写は時代が下るにしたがってより繊細になっている。
- (3) 18世紀初期以後の天象形の絵様は、渦鼻→渦若葉鼻→蔓若葉鼻に変化し、幕末期に雲鼻・波鼻や天象形と動物形が複合した複雑なデザインの木鼻が現れた。
- (4) 横田氏の建築作品にみる木鼻絵様は大きく3期に分けられ、第1期は渦鼻が主流であり、渦若葉鼻が出現する。また丸彫りの獅子鼻や象鼻が単独に用いられた。第2期は蔓若葉鼻または獅子鼻・象鼻が出現し、向拝には獅子鼻・象鼻が多く用いられた。第3期は透波鼻・透蔓若葉鼻が出現し、蔓若葉鼻が主流となった。
- (5) 横田氏の建築作品にみる木鼻絵様の変遷は雛形書における変遷と同じ傾向をもっている。
- (6) 遺構における木鼻絵様との比較によって横田家大工文書にみる木鼻絵様の一部をどの建物のものか特定することができ、木鼻絵様の時間的な変遷を明らかにできた。
- (7) 横田氏は江戸の先進的な絵様を「当世いろは絵様集」のような公刊された雛形本から学び、その上で蜘蛛流の図案を考案していた可能性が認められる。

(注)

- 1) 拙稿「蜘蛛流大工棟梁横田氏の木鼻絵様について—横田家大工文書の研究(5)—」共栄学園短期大学研究紀要、第15号、1999年3月
- 2) 「匠家絵様集」「大工絵様雑工雛形」の木鼻絵様は麓和善編著『日本建築古典叢書第9巻』大龍堂、1991年から抜粋した。
- 3) 麓和善氏は「木版本彫物書系絵様雛形の時代的特質」(『建築史学』第13号、1989年9月)において

- 絵様のモチーフを渦文・線形・天象・植物・動物・人物・器物・景物・文様に区分している(pp.46).
- 4) 麓和善氏は「木版本彫物書系絵様雛形の内容的特質」(『建築史学』第14号, 1990年3月)において木鼻絵様の変遷を次のように考察している。
- まず、『大匠雛形 彫物絵本』から『秘伝 匠家絵様集』までは、獅子鼻・象鼻などの獣面の木鼻を除けば、渦文が主体である。次いで、宝暦九年(1759)刊の『新撰大工雛形 五』や宝暦一三年刊の『大和絵様集』では、やはり渦文が主体ではあるものの、渦の一部に若葉が付き始め、具象模様化へのきざしが見えはじめる。以後、具象模様化が着実に進み、文政一〇年(1827)刊の『彫工雛形』や天保五年(1843)刊の『いろは絵様』からは、渦全体が植物・波・雲のものや、あるいは木鼻全体

- が波・雲のものが多くなる。さらに、嘉永三年(1850)刊の『大工絵様 雑工雛形』・『大工絵様 雑工雛形 貳編』では、雲に鶴や波に鯉など、天象・動物・植物の組み合わせさったものも見えるようになる。(pp.88-89)
- 5) 剛叟寺本堂(明治22・1889年)に例外的に用いられた。
- 6) 拙稿「横田家大工文書の研究(1)」共栄学園短期大学研究紀要 第11号 1995年3月
- 7) 麓和善氏は注4)文献(pp.97)において木版本彫物書系絵様雛形と遺構における細部意匠との関係を見ると、当時絵様雛形が広く利用されていたことが確認され、木版本が広く出版されようになると、むしろ絵様雛形のほうが時代の嗜好に先駆的であったと指摘している。

SYNOPSIS

Consideration on the Design Style of "Kibana" Created by the Yokota Family, or the Masterbuilders of the Kumo School

Dr. SHIRAI Hiroyasu

This paper offers an analysis of and a consideration on the design style on the architectural documents and works by the master builders of the Kumo School, chaired by the Yokota Family during the period from the late Edo to the early Meiji era.

As the result of our research on the design style of "Kibana", we can point out the following findings :

- 1) We can classify the design styles of "Kibana" into three types, namely the parts (Kashiranuki, Koryo, Hijiki, Udeki and Hafujiri), the carvings (flat and round) and the forms (animal, plant and other nature), all of which are shown in the carpenter's textbook at that time.
- 2) We found that in these documents of Kibana design there are Zou (elephant-like), and Baku (tapir-like) styles, appearing from early 18 C to 19 C. By nature these were carved roundly, but as time went on, these styles had been carved in details, for instance, the nature-style changing from "Uzu-bana" to "Uzuwakaba-bana" and to "Tsuruwakaba-bana". It is very interesting that eventually in the late Edo era, the design had been mixed between "Kibana" and the animal form.
- 3) We can also classify into three periods the "Kibana" designed by the Yokota Family : the first period "Uzuwakaba" using round carvings of "Shishi-bana" and "Zou-bana" at each ; the second "Tsuruwakaba-bana" and a mixture of "Shishi-bana" and "Zou-bana" ; and the third mainly "Tsuruwakaba-bana", and partly "Sukasi-nami-bana" and "Sukashi-tsuruwakaba-bana".
- 4) We conclude that, by comparing with the design style of "Kibana" in his documents, we can make clear when a certain design of his works is created.
- 5) It is absolutely possible to say that Mr. Yokota as a masterbuilder created the design style of "Kumo School" by learning from the textbook of the carpenters' documents in the Edo era.